

Title	泉州の波斯人と蒲壽庚
Sub Title	The persians in Ch'uan-chou and P'ushou-K'ang
Author	前嶋, 信次(Maejima, Shinji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1952
Jtitle	史学 Vol.25, No.3 (1952.) ,p.1(256)- 66(321)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19520000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

泉州の波斯人と蒲壽庚

前嶋信次

宋末元初に福建の泉州に據つて勢力を逞くした蒲壽庚がアラビヤ人であろうと云う創見を發表されたのは故藤田豊八博士で大正二年十一月の東洋學報(第三卷三號)に「ユール氏注マルコ・ポーロ紀行補正二則」を寄せ「附、泉州に於けるアラビヤ人」としてその説を述べられている。その根據は明の曹學佺大明輿地名勝志に引くところの詩話總龜に「宋末西域人蒲壽庚與弟壽庚云々」とあり、また蒲はヒルト氏の説いた如くアラビヤ人名に冠する Abu (父の義)の省譯と認められることで、「そのアラビヤ人なること略ぼ疑なきもの如く……」と云われている。

藤田博士の右の説とは全く獨立して、桑原隲藏博士は「重纂福建通志」から蒲壽庚の事蹟を發見し、大正三年十二月に、京都大學内の支那學界で講演された。更に大正四年四月に東京の史學會大會で發表され、その原稿に整理補訂を加えたものが同年十月から七年十月までの間に五回に亘つて史學雜誌に掲載され、更に幾多の増訂をしたものが大正十二年十一月上海の東亞攷究會から出版された。

史學會大會で發來後、その年九月、偶然「東洋學報」を検して藤田博士の論文を發見した桑原博士は「直にその事情を具して、同博士の諒解を求め置きたり」と自ら記された如くである。これに對し藤田博士も「一昨年の事と覺ゆ。予は泉州西域人蒲壽庚・壽庚のアラビア人なるべきを想ひ、その大要を「ユール氏注マルコポーロ補正二則」と題する文末に附識したり。固より隨筆的の記述にして殆ど人の顧るところとならざりき。その後、この事に關する材料を蒐集し、やゝ得るところありしが、昨年の史學大會に於いて桑原博士のこの問題につきて詳細なる研究を發表せらるゝあり、殆ど予が言はんと欲するところ、否な言ひ能はざるところに言及せられ、蒙を啓きしもの多かりき。その後博士は特に書を予に寄せられ、この問題に關し予が一昨年公にせしものに心付かざりしを陳謝せられしも、こは予の記述のあまりに簡略にして且つ他文に附識せし等の事情より起り、その罪全く予に在り。予は却て博士の雄篇を得てこの問題の略ぼ解⁽⁵⁾決せられしを喜ぶものなり」と記されている。

一方、蒲壽庚問題に對する桑原博士の研究はその後も續けられ、逝去の前年にあたる昭和五年に及んだ。「蒲壽庚の事蹟」増訂本が昭和十年秋に岩波書店から刊行され、戦後（昭和二十三年三月）も版を重ねている。まことに前後十五ヶ年を費した研究の結晶で「蒲壽庚の事蹟」一篇はわが國東洋學界が世界に誇示するに足る名著の一たることは、今更言をまたぬのである。昭和十年版に羽田享博士が寄せられた發刊の辭に「宋元鼎革の際アラブ人にして提舉市舶の官に在つた蒲壽庚の活動がこの書に依りて初めて翔實にせられたばかりでなく、これと直接間接に相關する幾多史上の重要な問題が明快に解決せられたことは明敏にして篤實なる博士の研究の輝かしい成果として内外學界をして舉つて讚嘆の辭を呈せしめた。大正十五年帝國學士院がその眞價を認め賞を贈つて表旌したのは、誠に當を得た沙汰と云はねば

ならぬ」とある。東洋文庫ではその英譯本を出版して廣く海外に紹介し、中國の學界でも、その華語譯本が刊行された。

この書は蒲壽庚の事蹟を中心とし、東西交渉史上の種々の問題に亘つているのであるが、主人公をアラビヤ人とした點もその内の重要な點である。桑原博士は「アラブ出身の蒲壽庚の事蹟云々」(上海版の辯言)「福建の泉州に在住したアラブ出身と想はるる蒲壽庚」(本文頁一)などと云い、その他の箇所でも、そのアラブ人であることを繰返されていゝ。内外の學界もこの點に特に興味を抱き、かつその事實を承認したのである。例えば張星烺氏の如きも「壽庚及壽庚之爲阿拉伯人、可以斷然不疑」と云つてゐる。⁽⁶⁾もし彼が普通の漢人だつたとしたら、これほどに學界の視聽も惹かず、或は桑原博士の雄篇も生れ出なかつたかも知れない。

閩南の風光明媚な海港泉州に據り、宋朝滅亡の悲劇を背景として蒲壽庚が演じた歴史上の役割は大きく評價すべきである。しかし、それだけでは、桑原博士は果して十五ヶ年もの研究を献けられたであろうか。主人公がアラブ人であつたとする所に、博士の感興をそそり、これだけの大研究となつた原因があると私は思つてゐる。

しかし、果して蒲壽庚はアラブ人であつたらうか。遺憾ながら博士の所論を見るに、そう斷定すべき確たる根據はない。私は彼をもつて、むしろペルシャ系とする考を持つてゐる。次にその理由を述べたいと思ふ。

二

桑原博士が蒲壽庚をアラブ人とされた根據は、

泉州の波斯人と蒲壽庚 (前嶋信次)

一、南宋の鄭所南の心史に「蒲受咄。祖南蕃人。富甲_二兩廣_一。據_二泉州_一。叛。」とあり
二、明末の何喬遠の聞書(卷一五二)に「蒲壽庚其先西域人。總_二諸蕃互市_一。居_二廣州_一。至_二壽庚父開宗_一。徙_二于泉_一。」とあることなどで

「吾が輩は更に彼の姓を蒲と稱する點から推測して、蒲壽庚は蓋しアラブ人即ちイスラム教徒であろうと斷定する。支那の記録に見えて居る外國人の姓に蒲とあるのは、アラブ人の名乘に普通な Abu (Abou) の音を表はしたものであらうといふ説は、今より二十餘年前に、獨逸のヒルト氏の唱へ出した所であるが、吾が輩はこの蒲壽庚の蒲も同様と認めたい。アラブ人ならば、南蕃人と稱しても西域人と稱しても事實少しも差支ないのである」と論を進め、更に南宋の光宗の紹熙三年(西紀一一九二)に廣州の知事として赴任した父の霖に隨つてかの地に赴いた岳柯が、後にその程史中に記録した廣州の蒲姓の風習のことを述べ、それがイスラム教徒の習俗と符合する所から「廣州滯留の蒲姓はアラブ人に相違あるまいと思ふ」と云われている。蒲姓は當時の廣州に於ける居留外人中の勢力者であつた。程史(卷十一)には

「番禺有_二海獠_一雜居。其最豪者蒲姓。號_二白番人_一。本占城之貴人也。既浮_レ海而遇_二風濤_一。憚_二於復反_一。乃請_二于其主_一。願_レ留_二中國_一。以通_レ往來之貨。主許焉。……」とあるが、桑原博士はこれについて「獠はもと南夷(西南夷)の一種であるが、當時南洋方面より海上支那に交通した外國商人を一般に海獠とも稱した。アラブ商人も勿論海獠と稱して差支ない。(中略)岳柯は蒲姓を占城の人と記して居るが、上に述べた如く、當時占城にアラブ商人の假寓した者が尠くない筈故、この蒲姓ももと占城に僑居したアラブ商人と認むべきであらう」と云い、更に岳柯の傳えた廣州の蒲姓は「蒲壽庚の祖先その人でないかと、想像を容るべき餘地が多い。若しこの想像に従つて、蒲姓を蒲壽庚の祖先と認めるならば、蒲姓は

西曆十二世紀末に出で、蒲壽庚は十三世紀の半過ぎの人故、蒲姓は多分蒲壽庚の祖父位に當るべき順序である」と云われた。⁽¹⁰⁾ 前述の如く、心史には蒲壽庚の祖は南蕃人で、富は兩廣に甲たりとあり、程史によると、さしもに豪華を極めた廣州の蒲姓も、その後久しからずして家運が傾いたとある。故に桑原博士が壽庚の父開宗の時、廣州から泉州に移住したのは、廣州の蒲姓の衰運と関係があるとし「蒲開宗が廣州を見限りて、當時盛に發展せる泉州へ移住せしも、恐らくは「程史」の編成を距る遠からざる時代なるべし」と考えられたのは妥當であると思われる。ちなみに同じく桑原博士は程史は宋の嘉定十年（西紀一二一七）前後に編成されたものであらうとされている。⁽¹¹⁾

岳柯の傳えた廣州の富豪蒲姓が、泉州の蒲壽庚の祖とすれば、壽庚の祖は西域人ではあるが、先ず占城に住み、そこから廣州に定住、巨富を成した後に家運が傾き、次に壽庚の父の時に泉州に移つたと云うことになる。これが桑原博士の説であり、博士は更にこれをアラブ人と断定されたのである。

しかし、今まで舉げて來た根據中に何一つ確實にアラブ人と推定すべき證據は見當らない。心史の云う「南蕃人」は對照が極めて廣いし、閩書に云う西域人もこれまた對照が廣く、アラブ人はその一部に過ぎない。つまりわれわれが西洋人と云うと同じく、その中には多種の民族を含んでいる。第三にアラビヤ語の「アブー」に蒲が當ると云う説で、これはヒルトの主張以來、疑を挾む者がなく、妥當と認められる。唐書大食傳には *Abū'l-Abbās* を阿蒲羅拔、*Abū-Ja'far* を阿蒲恭拂と寫してあることは周知の事であるが、*Abū* は日常語では略して *Bū* と云う場合も多いと云えば、⁽¹²⁾ 蒲の字をあてる事は正しい。元來アブー〇〇と云うのは一種の異名で、*Kunya* と呼んでいる。最も普通の場合はその下に、その人の息子の名を置く。稀には娘の名の場合もある。この場合は一種の敬稱で、相手がその人に呼びかけるときに用い

る。アブーは「父」の義であるが「…の主」と云う様な意味に變り、その下に種々の名稱をつける場合も多い。例えばアツバース朝のカリフ、ハールームル・ラシードの宮廷にいた有名な詩人 Abu Nuwas のヌワースは「捲髮」の義であるが、彼が兩肩に捲髮を垂れていた爲にかく呼ばれたとの説がある。また詩人 Hasan bin Thabit はマホメットの敵を詩を以つて鋭く攻撃したので *Abū-l-ḥusām* と呼ばれた。「利刃の人」と云う様な意味である。⁽¹⁴⁾

この呼稱は人間のみでなく、動物や物の異稱にも用いられる。例えば *abū-l-ḥusain* (小要塞の主の義) は狐、*abū-l-baidh* (卵の父) は駝鳥、*abū-nabhan* (呼び覺しの父) は雞、*abū-l-naum* (睡りの父) は罌粟を意味する如くである。⁽¹⁵⁾

本來はアラビヤ語であるが、イスラム教の發展と共に廣くその教徒の間に普及し、東は印度、中央アジアから、西はモロッコ、スペインに至るまで教徒の命名法は殆ど一様となつた。故にアブー○○と呼ばれたからと云つてアラブ人は限らない事は勿論である。これは、ここに例を擧げるまでもない事ながら、アツバース朝建國の貢獻者アブー・ムスリムはイスパバーン生れのイラン人とされ、*Abū-l-Ma'sūh* (一六一五歿) はインドのアツラーハバードの歴史家である。十三世紀の人で同名のトルコ系詩人もある。

故に姓が蒲であるからと云つて、必ずしもアラブ人とは云い得ない。

蒲壽庚の父開宗の時に、廣州から泉州に移住したのであるが、廣州には古來種々雑多の外國人が居住したことも、これまた周知の事實である。唐の玄宗の天寶七載(西紀七四八)に鑑真和尚の一行がこの地に至つたとき

江中有⁽¹⁶⁾波羅門、波斯、崑崙等船不知其數。……師子國、大石國、骨唐國、白蠻、赤蠻等往來居住種類極多。

とあり、また唐の僖宗の乾符六年(八七九)黃巢が廣州を陥れた時のことをアブー・ザイドはその「シナ、インド物

語」の中で「その間の事情に通じた人の言う所によればイスラム教徒 (muslimin) ユダヤ教徒 (yahūd) キリスト教徒 (nasāra) 及び拜火教徒 (majūs) のうち十二万人が殺された」としてゐる。⁽¹⁷⁾

更に廣州の蒲姓はもと占城から來たのだとする岳柯の所傳があるが、占城にイスラム教徒のコロニーのあつた事も、これまたよく知られた事實で、Champaをアラビヤ語地理書にはSanfと書いてゐる。九世紀中葉のイブン・フルダーズビー Iḥw Khurādādhbeh や同時代のヤアクービー Ya'qūbī 以來多數のアラビヤ地理學者がこの地の事を記載してゐるが、要約すればシナの諸港に至る途中の淡水の補給地であり、またサンフイーと呼ばれる沈香の産地として知られてゐるのである。

仄聞する所によれば中國の張秀民氏は最近蒲壽庚のチャム人なるべき説を唱えてゐる由である。その説の詳細は知らないが、廣州の蒲姓 (岳柯の所傳の) がもと占城の貴人である所から出てゐるのかも知れない。しかし、蒲壽庚の祖は西域人だと云う所傳の方が、はつきりしてゐて、廣州の蒲姓と蒲壽庚とを結びつけたのは桑原博士で、妥當な説乍ら、明確な記録に基いたわけではない。

假に占城から來たにせよ、必しもチャム人とは云えない。占城にあつた中世のイスラム教徒の居留地の遺物と認められるアラビヤ語の碑文が二面發見されてゐる。佛人ポール・ラヴェッセ Paul Ravaisse の研究によれば、この碑は一九〇二年から同七年の間にフランスの某海軍士官が見出して拓本をとつたが、原碑の所在地は不詳である。ただしチャム人が今も自分等の民族の發祥地と考へてゐる Phauri 及び Phaurang の溪谷地方の一部で海岸から遠からぬ所にあつたもので、中世時代にその邊にあつたイスラム教徒のコロニーに建てられたものであらうと云う。⁽¹⁸⁾ 拓本はインド學者

バルト(A. Barth)に渡され、更にアラビザンのデレンブール Hartwig Derenbourg の手に入り、デレンブールはその死の少し前にラヴェッスに托したのである。

その一つは極めて美しいクーフィック書體で十五行、うち末尾の二行は拓本には無かつた。土に埋もれていたものであろうとされる。イスラム教徒の墓表に刻されたもので、墓の主は Abū Kāmil こと Ahmad bin Abi Ibrāhīm bin Abi 'Arrāda ar-Rahdār じ、ヒジュラ後四百三十一年の safar の月廿九日の夜(西紀一〇三九、十一月廿一日)に世を去つたとある。特に注目すべきは、名前の最後にあるラハダールと云う言葉である。ラヴェッス氏は、ペルシャ語 rahdār の第一長母音をアラビヤ語風に短かくした形と云つている。スタインガスのペルシャ語辭典によれば

road-patrol, one who has charge of the public road, a road-toll gatherer

とあり、公道の警備、通行税の徴収などに當つた役人で、本來はペルシャの制度である。後にはアラビヤ人社會にも採用されたが、エジプトではその存在が認められず、近世まで残つたのも矢張りペルシャに於いてであつたと云う。⁽¹⁹⁾

ラファール・デュ・マン師の「一六六〇年に於けるペルシャの現状」なる書中⁽²⁰⁾には、ラーハダールがつめてゐるのは、丁度、關所の置かれる場所の如く、是非とも通行しなければならぬ峠路の屈折部などであつた。ペルシャには各所に要害の隘路があるので、國全體が一大牢獄の如く、逮捕令でも出された人が脱出するのは至難であると云うことが記されて居り、またシャルダンの旅行記にも⁽²¹⁾「ラーハダールは公道の警備官で、國內至る所、村落にも、隊商宿營地(カラヴァンセライ)にも置いてある。……彼等は通行の商品に小額の税をかけて、それで生活している」とある由である。ラヴェッス氏は、それについて「では、このラーハダールの制度が十一世紀のチャムパにあつたイスラム教徒の居留地に

も行われていたのであろうか。それともイラクなり、ペルシャなりで、その職に就いていた人が、チャムパに移住したのか、その點は明かではない。何れにせよ、かかる僻遠の地に、ペルシャのサファヴィー王朝(1502~1736)時代までは殆どその記録がなく、アラビヤ語文献の著者達も殆どとりあけなかつた右の制度が、こうして書かれているのを見るとは誠に意外だとの驚きを禁じ得ない」と云つて⁽²²⁾いる。

右のラーハダール(ラハダール)と云う役名だけで、この墓の主アブー・カーミルの人種別を判断することは困難だが、どこかペルシャ系らしい點がある。

第二の碑文も同じくクフィー書體のアラビヤ文であるが、これは第一の碑とは打つて變つて極めて拙劣幼稚なもの、しかも磨滅が甚しく、読み得る部分は各行數語に過ぎない(全部で十行ある)。ラヴェッス氏はこれを西紀一〇二五—三五の間のものと推定し、當時のチャムパのイスラム教徒居留民にあて、原住民との商業取引、貨幣の兩替、寄附金の支拂その他に關する注意事項を述べた布告文と解釋⁽²³⁾している。

第一行に「三百の bazar-rok」と云う言葉があるが、これはもとインドの慣用語で「市場銀」の義。銀、銅、錫、鉛を合鑄した小額貨幣、アフリカより東洋まで南海地方に廣く流通し、モルツカ島では Bazarucos と呼ばれたもの(ヒンドスタニーの bazaruk)。また第八行には Sultan Mahmūd とある。ラヴェッス氏は、これはインドの征服者として名高いガズナのマハムード王(九九八一—一〇三〇)のことで、「ガズナ朝のスルターン・マハムードの maula(解放奴隸)の何某云々」とあつたのを、他の文字は磨滅したのかも知れぬと想像している。また第九行には…mi Bay 'Ali al-ker…とあるが「バイイ」はトルコの官名である。トルコ系のガズナのマハムードの名のあることと云い、トルコの

官名の示されていることと云い「チャムパのイスラム教徒居留地にはアラブ人やペルシャ人のみでなく、トルコ人も居たのである」とラヴェッス氏は論じている。⁽²⁴⁾

占城のイスラム教徒居留地の研究は本稿の直接の目的でないから、簡略にとどめようと思うが、ラヴェッス氏の研究は誠に面白いもので、その居留民の人種的構成を窺う有力な手がかりである。故に廣州の蒲姓がもと占城から來たイスラム教徒であつたとしても、それがアラビヤ人であつたとも断定出來なければ、チャム人であつたとも云いきれないことは云うまでもない。或はペルシャ人であつたかも知れず、トルコ系の人であつたかも知れぬのである。

三

蒲壽庚が據つた泉州が宋元の時代には世界一流の貿易港で、西域人はこれをザイトゥーン *Zaitun* と呼んだことは周知の事實である。ザイトゥーンはペルシャ語やアラビヤ語でオリイヴ、及びその油を意味する。しかし泉州がかく呼ばれたのは、別にオリイヴ樹と縁が深かつたためではなくて、泉州の別名刺桐城の刺桐の轉訛であることは既に定説である。Phillips 氏や Douglas 氏等の *Zaitun* 漳州説は今では問題とするに足らぬであろう。

しかし乍ら西アジアの人々はザイトゥーン即ち泉州の名から、自分達に親しみの深いオリイヴの事を連想し「オリイヴの港」と解釋していたものと思われる。そのことは、十四世中ごろにこの地を訪れたイブン・バットゥータが「この市はザイトゥーンと呼ばれているのに、オリイヴ樹は見當らぬ⁽²⁵⁾」と意外の感を表明していることから想像し得る。

閩書(卷三三、建置志)によれば

泉州城、古名刺桐城。刺桐俗名火紅刺是也。……此樹上至興化、下至漳而已。

とあつて、福建省でも興化と漳州の間の地域に生ずるのみであると云う。故に東洋に親しみのなかつた西域人などならば、音の類似からオリヅの事を連想すべきことは當然である。桑原博士は明の黃仲昭の八閩通志を引き「五代の半頃に泉州を管領した留從效といふ者が、泉州城を改築した際に、城壁の四周に刺桐樹を植え付けたから、泉州城はその後刺桐城とも、桐城とも呼ばるることとなつた」と云われ、更にその註の中で「留從效が泉州城に刺桐を植えし年代は的確に知るべからざれど、西曆九百四十四年以後なるべきは明なり」と記されている。

乾隆廿八年の泉州府志（卷十一）によると泉州府の城壁は三重で、一部分は四重にもなつていた。一番内側に衙城、その外に子城、更にそれをめぐつて羅城があり、羅城の南方の部分は更にその外に翼城をめぐらしていた。衙城は南唐の節度使留從效の築く所であり、その外側の子城には東西南北の四門があつて、この間に刺桐を環植し、これを桐城と云つた。後に、更にその外側に羅城をめぐらすに及んで、子城の四門は鼓樓に模様變えされたとある。そしてまた、この子城の方は「唐天祐三年（西紀九〇六）節度使王審知築」ともしてある。もしこれが信用出来れば刺桐を植えたのは唐末の王審知の時で、桑原博士の説かれた如く西紀九四四年以後とするよりも、少し古いことになる。しかし、乾隆泉州府志がどこまで信用出来るか疑問であるし、宋代の嘉定、淳祐の二志（これは現在では散佚したものと認められる）、明代の嘉靖、隆慶、万曆の三志（これらは同治重版乾隆府志の序に、三志俱散佚無存とはあるけれども、上野圖書館、内閣文庫などの例で見る如く、まだそちこちに存するものと思われる。昭和四年に筆者は福州の東瀛學校で万曆泉州府志を目睹した記憶がある）、などの間の關係を精査して見ないとわからぬので、この問題は保留して置きたい。また、ど

ちらでも、さして影響のない問題でもある。

刺桐はまた琉球、台灣にも産し、沖繩ではテイゴと云うとの坪井博士の注意が桑原博士の著に引用してある。⁽³⁸⁾ 台灣、ことにもとの府城であつた台南市にはこの樹の古木があちこちにあつたことを筆者は回想する。そして台南城、即ちもとの台灣府城も泉州と同じく刺桐城という別名を持つていた。かの地はもともと泉州渡來の漢人の多い所で、住民の七割がそれ、あとの三割が漳州人その他であるとされている。市の南郊の墓地の間をさまようと、本籍が晋江即ち泉州城と記してある墓表が多く目についた。

刺桐の花は四月ころに、その刺のある古怪とでも評すべき幹や枝から眞紅の色もあざやかに咲きいでる。台南の泉州系市民は、もとは城外の三郊、即ち南郊、北郊、糖郊にひろがつていて、城内には漳州系が多かつたと云う。しかし後に漳州系市民は漸次減少して泉州系が壓倒的となつた。三郊組合と云うものは、台南の商人組合中最も有力なものであつた。藍鼎元の鹿州全集によれば康熙六十年の朱一貴の亂後、鼎元は台灣府に築城するが急務である事を論じ、城壁の代りに刺竹をめぐらし、その外側に刺桐を植えよと論じている。「刺桐を削りて地に挿し、編して藩籬と爲さば春に逢うて發生し、たちどころに蒼茂を見ん」と云つてゐる。刺竹は實際に植えられたが、刺桐の方はどうなつたか記録に見當らぬ。何れにせよ、泉州系台南市民の祖達はこの樹木を植え、そして自分等の街をも刺桐城と呼んだりして故郷を偲んだものであるらしい。

四

さて泉州が宋元時代に世界一流の海港であつた以上、多數の外國人が居住していたことは當然であるが、私は特に有力なペルシャ人の居留地があつたものと思つてゐる。そして當時この地に來た外國人に關する記録を集めれば集めるほど、殆どその悉くと云つてもよいほどペルシャ系の色彩を示していることに興味を抱くのである。次にそのいくつかの例を挙げたいと思う。その結果が蒲壽庚の人種問題にも光を投ずれば幸である。

明治四十三年發行の史學研究會講演集第三に羽田享博士は「日本に傳はれる波斯文に就て」と題する研究を發表された。その前年の十月三十一日に史學研究會例會で講演された所に基いたもので、もと柵尾の高山寺の方便智院に藏せられていた古文書の研究である。この文書は「南番文字」と呼ばれ、維新のころ他の寶物とともに世間に流出し、轉輾して京都の山田永年氏の所藏に歸した。鎌倉時代の和紙に毛筆墨汁で書いてあり、久しく京都帝室博物館に陳列されていたが、格別の注意を惹かなかつたと云う。羽田博士は「余、偶々此寫眞を見て、其南番文字といふものの、波斯文(新)なるが如きを思ひ、就て研究を試みしに、全く波斯の詩を記したるものにして、下方に記せる譯文とは到底意味の合するものに非ざるを知れり。今茲に之を説くもの、もとより史上にしかく大なる價值を有するが爲には非ず。只だ我が鎌倉時代に於て、絶域の文字が傳えられ、而して能く今日に之を残すの珍なるを思ふとともに、之を以て漠然南番文字の名の下に葬り去りて、人を惑はしむるの愚なるを思ふによるのみ」と述べられている。

これと、殆ど時を同じくして清國の羅振玉氏は京都に來遊し、この文書に著目、その寫眞を美術雜誌「神州國光集」の一九〇九年(明治四二)の某號に發表した。「南番文字原文藏日本。今年上虞羅別有君遊東瀛、訪得攝影以歸」としてあるだけで格別の解説は附けてない。これが佛のポール・ペリオ氏の注意を惹き、一九一三年(大正二)の七一八

月號の *Journal Asiatique* 及び *Les plus anciens monuments de l'écriture arabe en Chine, avec des notes de MM. Clément Huart et Denison Ross.* と題する研究を發表し「この文書の内容は大きな事實を傳えるものではないが、その書かれた年代の點で記憶すべき價值がある。今までに極東地方に於いて發見され最古のものとして來たアラビヤ文字の文書よりも、更に約一世紀先行することがわかるであろう」と云つてゐる。ただしペリオ氏は、これよりも先に出た羽田博士の研究を見ることが出来なかつた。それで神州國光集の寫眞の不鮮明なことを歎き、何でも日本の雜誌藝文に京都大學の某學者がこの文書に就いて研究を發表したとの噂がある。京都の學者ならば、もつと切實な研究が出来たであろうが、その内容を知り得ぬのは残念である。藝文の内容はハノイの佛國極東學院の學報に紹介されているが、南番文書の研究のことは見當らぬと云う意味の事を述べてゐる。

羽田、ペリオ二氏の研究はかく獨立して行われただけに兩者を比較すると興味深いものがある。

この文書にはナスヒー書體のペルシャ語の四行詩二首に、次の如き漢字の書き入れがしてある。

「爲送遣本朝辨和尚禪庵乞筆之彼和尚

殊芳印度之風故也 沙門慶政謹記之

(ただしペリオの利用した寫眞は不鮮明だつたから「爲遣至(?) 本朝辨(?) 和尚禪菴○事之○和尚○芳印度之風故也 ○門○○謹記之」としか讀めなかつた)

此是南番文字也

南無釋加如來

南無阿彌陀佛
也兩三人到來
舶上〇書之

爾時大宋嘉定

十年丁丑於泉州

記之

南番三寶名

バヌッタラ ボダラム ビク

方便智院

」

ペリオにはこの詩を泉州で得たものが慶政キョウセイと云う僧であつたことも、これを贈られたものが榎尾高山寺の開基高辨(明惠上人)であつたことも、寫眞の不鮮明の爲に知り得なかつた。ペリオが想像したこの文書の由來は左の如くである。

「一二二七(嘉定十)年、日本の一佛僧が泉州(ザイトゥーン)に居たとき、たまたま、かのペルシャ灣からシナ沿岸にかけて通商していた大商船の一つが到着した。かの民族一般にそうである如く、好奇心の強いその日本人は、異國人と知合いになり、何かその言葉で記した肉筆のものを欲しいがと頼んだのである。商人達は思い出すまゝに詩二首を

書いて與えた。所がかの佛僧はこれを「南番」の言葉で書いた佛陀への呼びかけの言葉と解釋し、とりいそいで同國人の所へ、……恐らくは彼自身も暮した事のある僧院の僧侶達に送つたものであろう。この文書は恐らく現代まで同じ僧院に保存されていたもので、それが方便智院と云う京都地方の一寺院であることは疑うべくもない。見らるる如く、この一片の文書は、その内容から云えば、誠につまらぬものではあるが、我々にとつては、かの福建の大海港にアジャ各民族の代表を引き寄せた通商活動の好實例を示してくれるものなのである。更にアルナイス師 *Pere Arnaiz* が同じ泉州で發見した碑文よりも更に百年も古いもので、今までに極東地方が遺した唯一のアラビヤ文字の古文書であり、その内容により元朝よりも更に古いものであることが確められるのである⁽²⁹⁾」

羽田博士は

「互ひに万里異邦の客、偶々南海の舶上に邂逅して感慨極るなく餘命を期して再會を希ふ。如何せん言辭通ぜず、離別の詞華は終に念佛の文字と解せらるるに至れり⁽³⁰⁾」と記された。ペリオの想像も大體正鵠を得ているものと思われる。當時まだ年若かつたと思われる(その理由は後に述べる)僧慶政は宋の嘉定十年(順徳天皇の建保五年)即ち源實朝が害せられる前々年に泉州港に到來した蕃舶上で兩三名の異國人と相會し、特に印度の風を慕う知友明恵上人に贈らなために、このペルシャ語の詩を書いてもらつたのである。慶政上人の事蹟は羽田博士の研究中に詳しく、その末尾に「篇中慶政上人のことに關しては京都文科大學新村教授の教示によりて知り得たるもの多し」と斷つてある。三井續灯記によれば、天台の僧で、もと近江國園城寺の學僧であつた。能舜法師に師事して經論を學び、西山の法華寺山に入り、文永五年(一二六八)十月六日に寂すとある(佛教人名辭書)。この歿年が信すべくば、泉州でペルシャの詩を得てから足

かけ五十二年後にあたる。相當に長壽を保つたとしても、その入宋はまだ少壯時代のことだつたと想像される。

入宋のことも羽田博士の研究によれば續古今集卷九離別歌の部に

慶政上人もろこしへわたりける時つかはしける

從二位家隆

厭ふとは照日のもとにきゝしかど唐土迄は思はざりしを

かへし

もろこしも猶すみうくば歸りこむ忘れ得はてし八重の鹽風

とあり、万代集雜誌に「宋朝に入て侍りける日よみ侍ける」とて戒覺上人の歌をのせ、その次に「これももろこしにてよめる」として慶政上人の

思ひきや虎ふす野べと聞おきし唐國寒き旅ねせんとは

を載せてあると云う。また柵尾の明惠上人が印度を慕つたことは元久二年（一二〇五）に印度出遊の壯圖を企て、行程などを研究したほどであり、慶政と親交のあつたことも、續古今集十六哀傷歌の部、新千載集釋教歌の中にのせた所などにより知り得ると云う。要するに慶政は山城國松尾の法華山寺に居り、當時の歌人及び高僧等に知己多く、（風雅集、續拾遺集等に光明峰寺入道道家、前内大臣基家等と交遊し應酬した歌が残つている）自身も和歌をよくし、少壯時入宋し、文永五年頃に示寂した人とされるのである。

さて、その將來した二首のペルシャ語の詩は、羽田氏の方は苦心して解讀した上に、當時の東京外國語學校教授であつたインドのムハammad・バラカットツラー Muhammad Bereketullah 氏の意見をも聞いたものの如く、ペリオ氏の

方は巴里東洋語學校教授クレマン・ユアール Clément Huart (1854~1926) の助力を求めたのである。バ氏は羽田氏に第一の詩は波斯では通俗のもので、フィルドースイーのシャーナーメーの中にあると語つた由である。ペリオの方は「平凡、しかも不正確な詩で、漢字の附記が無かつたら發表するだけの價值もなからう」とし、到底大詩人フィルドースイーの傑作中の一部などとする所ではない。かつ、羽田氏の解釋とユアールのそれとの間には若干の差がある。この問題はここに詳論することを避けようと思うが、私の考では、南番文書のペルシャ詩は、慶政上人がペルシャ人の書いた所に基いて模寫したもので、ペルシャ人自身の肉筆ではないと思う。その故に書體がくすれ、解釋にも人によつて異同を生ずるのである。第一首の意味は

喜びの世は誰にも永續させぬもの

天は今日あたえ、明日はとり去る

この世は思い出にて、われらは去り行くもの

よき行のほか何が残ろう

第二首は(羽田氏の解釋、ただし羽田氏の原文は英語)

もしわが生涯にめぐみ下らば

おんみの顔みて、眼を輝かさむ

されど青き空つれなく變らば、

おんみは別れ去り、我もしかせむ

または（ユアールの解釋、原文佛語）

英雄にのぞましきは優しさと寛大さよ

いざ、おんみの顔でわが目を輝かさしてよ

友がわが眼を別れにて青く（くもら）したれば。

いざさらば、友よ、いざさらば

ユアールの解釋の方はやゝ不明瞭で、本人も「この詩の韻律が何であるか、わかりかねる」と云つてゐるほどである。二首とも前記の如くナスヒー書體でしるしてある。云うまでもなく、ペルシャ人が愛用する流麗なナスターリーク書體は十四世紀末に始まり、十五世紀に至つて一般に擴まつたのであるから、この文書の出來たころにはペルシャ人もナスヒー書體を用いたことは當然ではあるが、それにしても興味深く見受けられる。

五

嘉定十年は丁度名吏眞徳秀が泉州の知州事として赴任した歳であつた。彼はこの年に來任し、足掛け三年在任した後、同十二年に隆興府の知事に轉じ、紹定五年（一二三二）に再任し、次の年福建安撫使に榮轉した。⁽³¹⁾字は景元、西山と號し、浦城の人で、慶元五年（一一九九）の進士であるが、泉州在任中治績大に擧り名宦祠に祀られ、⁽³²⁾後世まで慕われた事は彼地の地志類に明かな所である。

その初めて泉州に赴任して來た時のこととして

嘉定十年知泉州。時番舶懼苛征、至者歲無三四。德秀至、郡首寬之。遂歲增三十六艘。

とあつて、赴任當時には外國船は多數は泉州に來なかつたと云う。德秀の赴任は閩書(卷七、方域志)に「嘉定十年夏五月雨ふらず。守眞文忠始めて州に至り云々」とある所から見て、或は五月ころの事であつたのではないかと思われる。

桑原博士によれば、「南海から支那へ來るには、西南風の吹く舊曆の四月の末から五、六月の頃で、支那から南海に往くのはその反對に東北風の吹く十月末から十二月の間に限つた。是故に舊曆の五月から十月にかけての半年間が、支那の諸港に在る蕃坊の繁昌期」であつたと云う。

慶政上人が泉州に到來した船上でペルシャ人と語つたのも、恐らく、その年の夏ころと思われるが、その時は眞德秀が既に知府として來ていたらしく、そして其歲には三、四隻位の蕃舶しか來なかつたらしいのである。

當時、泉州の提舉市舶司として貿易船の取締りをしてしたのは趙崇度と云う人であつた。乾隆泉州府志(卷二九)に舊志(明の隆慶府志または万曆府志であろう)を引き

趙崇度嘉定間提舉市舶。先是海商貨至、官競刮取、命曰和買。實不給一錢。於是商舶滋少、供貢缺絕。崇度與郡守眞德秀同心剗洗前弊、罷和買、禁重征。逾年舶至三倍。

としてある。これは眞德秀の赴任當初の事情と符合するから、德秀と崇度と協力して、外國貿易政策の刷新をしたものと思われるのである。

有名な諸蕃志の著者趙汝适もまた泉州の提舉市舶司であつた。泉州府志(乾隆本卷二十六)に、歴代の市舶司の名を

挙げ趙汝适の名の下に「嘉定間任」としてある。彼はその在任中に調査した海外諸國の事情を集め、嶺外代答その他の文献を基として諸蕃志を著したのであるが、宋の太宗八世の孫にあたり、かつて臨安の通判であつた。その著の序に「寶慶元年（一二二五）九月 日朝散大夫提舉福建路市舶趙汝适序」と自ら記して居る如く、寶慶元年になおその職にあつたのであり、また閩書（卷四三、文蒞志）によれば趙崇度と彼との間には施棫、魏峴の二人が市舶司として在任しているから、汝适の任官は嘉定年間のことと思われ⁽³⁵⁾る。當時宋の宗室に屬するもので泉州に住んでいたものが三千三百餘人もあつた事は乾隆泉州府志（卷廿九）の眞德秀傳に「時に南外宗官、泉に在るもの三千三百餘人、上中下末四等を以て給應す」とある事で知られる。汝适もその一人だつたのである。

趙汝适の泉州在住の時期は、右の如く、慶政上人入宋のころと、ほぼ同時代と云えるのである。その諸蕃志中大食國の條に

「番商有り。施那幃と云う。大食の人なり。泉南に躋寓し、財を輕んじ施を樂しむ。西土の氣習あり。叢塚を城外の東南隅に作り、以て胡賈の遺骸を掩う。提舶林之奇其の實を記す」とある。

林之奇の傳は宋史儒林傳（卷四三三）閩書（卷七五、英舊志）その他にある。字は少穎、福州候官の人、宋の徽宗の政和二年（一一二二）に生れ、はつきりした年次は不明だが高宗の紹興中（一一三一—一一六二）に提舉市舶司として泉州に赴任、孝宗の淳熙三年（一一七六）に歿した。尙書集解、道山記聞その他の著があつて世に行われたと云う。

ヒルトとロックヒルの諸蕃志譯註には、この道山記聞が番商施那幃の事蹟を記したものであろうとしている。⁽³⁶⁾しかしその書が傳わらぬので明確なことはわからぬ。

泉南は泉州城の南郊にあり、晉江の流れに臨んで海上交通の便利が多く、桑原博士や、ヒルト氏の説の如く、ここに外人居留地があつたらしい。⁽³⁷⁾また施那幃は、これも桑原氏の説の如く *Shilaw* (*Sirat*) の人の義で、*Shilavi* の音譯にちがいない。⁽³⁸⁾ スィーラーフは云うまでもなくペルシャ灣東岸ファールス地方の海港で、九、十世紀ころには印度洋貿易の大中心地であつた。名高い商人スライマーン *Sulaiman at-Tajir* のインド、シナ航海記や (西紀八五一ころ)、スィーラーフのアブー・ザイドル・ハサン *Abū Zaid al-Hasan as-Sirafi* のシナ、インド記 (九一六ころ) によれば、インドやシナ方面に行く商船はスィーラーフから出發したので、各地の産物はバスラ、ウマーンその他を經由してこの地に集つたとある。この町に關する記載はアラビヤ語地理書に乏しくない。十世紀中ごろのアル・イスタフリー *al-Istakhrī* はスィーラーフの商人はファールス全土で最も富裕だと云い、アル・ムカッダスィー *al-Muqaddasi* はその著 (九八五ころ) 中で、スィーラーフは通商上バスラと競争し、その屋づくりは彼が見たうちで最も壯麗であるが、ヒジュラ後三六六年または三六七年 (西紀九七六—七八) の、七日間続いた地震で一部は荒廢したと云つている。この地震のところあたりまでが絶頂で、ブーイ朝の滅亡 (ファールスのブーイ王家の滅亡は西紀一〇五五) と共に衰微に向つたと云う。その後カイス島 *Qais* の領主 (アミール) ルクヌツ・ダウラ・フマールタギーン *Rukn-ad-Dawlah Khumartagin* がカイス島を外船の寄港地として以來、スィーラーフの繁榮はこれに奪ひ去られた。十三世紀初めヤークート *Yaqut* が訪れたときは、昔の名残りを留めるものはチーク材の柱のモスクのみで、もとの街は廢墟となつて居り、港も泥砂に埋もれていたと云う。そしてこのヤークートの言う所によれば、*Sirat* はそのころ土着人によつて *Shilaw* と呼ばれていたと云う。⁽³⁹⁾

これによつて見るにスイーラーフと云うのはアラビヤ語化された形で、ファールス、即ちパールス（ペルシャ）人本来の呼稱はシーラーウと云つたのであらう。故に「スイーラーフの人」と云う場合、アラビヤ語風に云えば *as-Sirāfi* であるが、土着のペルシャ人は *Shilāwi* と呼んだものと思われる。故に諸蕃志の施那幃は「スイーラーフの人」の義とする説は正確としなければならぬ。

既に、この人がペルシャのスイーラーフ出身で、しかも、土着人風に「シーラーウィー」と稱していたとすれば、人もイラン系の人と推察されるのである。イスラム教徒の名前が七つの要素に分類されることは、ここに繰返すまでもない。アブー○○、イブン○○などの如く血縁關係を示すものは前文の如くクンヤ *Kunya* とよび、部族、出身地、居住地、宗派、職業その他の關係を示すものを *al-Ansab* または *Ismi-nisbat* と云つてゐる。

「シーラーウィー」と云うのは、勿論このアンサブに當るわけであるが、その名前他の部分は何と云つたものであらうか。

元の吳鑿の清淨寺記（清淨寺は泉州にある。廣州の懷聖寺と並び、シナに現在するイスラム教のモスク中最古のもの）が閩書（卷七方域志）に引かれているが、それによると

「宋の紹興元年、納只ト穆茲喜魯丁なる者あり。撒邨威より商舶に従つて泉に來り、茲寺を泉州の南城に狝む。銀灯香爐を造つて、以つて天に供う。土田房屋を買い以て衆に給す」とある。撒邨威は桑原博士の説の如く *Shilāw* = *Sirāf* (*Shilaw*) うちがさなす。

紹興元年（一一三一）と云うのは、その人が初めて泉州に來た年次なのか、清淨寺を建てた年なのか、はつきりしな

いが、私はその泉州に來た年次とするがよいと思う。理由は後文に述べるが、諸蕃志に書かれた大食人施那幃、即ち泉州城外の東南隅に叢塚を作つた人物も紹興年間に彼地に居た人である。何故ならば提舉市舶司の林之奇がそれについて文を草したと云うが、林之奇が泉州に赴任したのは前述の如く紹興年間のことだつたからである。諸蕃志によれば施那幃は「財を輕んじ施を樂しみ、西土の氣習あり」とある。吳鑿の清淨寺記に見えた納只トそれがしも、私財を投じてこの寺を建て、土田房屋を買つて衆に給したりし、その所行頗る相通じ、しかも、どちらも同じくスイーラーフの人である。泉州城外の東南隅の叢塚とは、すでにヒルト氏が指摘した如く、⁽⁴¹⁾東南郊の靈山^{ウシヤ}なることは疑うべくもない。泉州城から二キロ米ほどの所にある丘陵で、その西側の斜面には現在でも回教先賢塚を初め、多數の墳墓がある。何喬遠は閩書(卷七方域志)中に靈山なる項を設け詳細に説明している。

「郡の東南より折れて東し、湖岡に遵つて南行すれば靈山と爲る。默德那國(al-Madinah = Medina)の二人ありて葬らる。回々の祖なり。回回家言う、默德那國に嗎喊叭德(Muhammad)聖人あり……………門徒に大賢四人あり。唐の武德中來朝し、遂に教を中國に傳う。一賢は廣州に傳教す。二賢は揚州に傳教す。三賢と四賢は泉州に傳教し、卒して此の山に葬らる。然れば則ち二人は唐時の人なり。二人是の山に葬られてより、夜光顯發す。人異し^{アヤ}んで之を靈とし、名づけて聖墓と曰う。西方聖人の墓たるを曰うなり云々」

また中華民國十五年(一九二六)に當時廈門大學の教授だつた張星烺、陳萬里及びドイツ人艾鏢風 Focke の諸氏は泉州を訪問した。十一月五日に靈山に登つてゐるが、張氏の記録を見ると、泉州の仁風門(東門)を出「折れて南に向えば、新修の汽車道(自動車道路)あり。……………此の道より車に向つて行くこと約二里、車(人力車)を下りて、歩行し、

南に向う。農戸數家を経れば、東に山坡を望む。墳墓累々、先賢の塚は即ち半山にあり。乃ち衣を擣り草を抜き、緩歩して上る。過る所の墓、其の墓石あるものは之を讀むに皆回回人なり。墓は皆長圓形にて、漢人の墓の圓きが如からず。此の山は昔時或は専ら回回の葬地たりしなり」とある。⁽⁴²⁾

また所謂回教先賢の墓の西側には明の永樂十五年五月十六日に太監鄭和がここに詣でた事を記した刻文があり

「欽差大監鄭和前往西洋忽魯謨斯等國公幹。永樂十五年五月十六日、於此行香、望靈聖庇祐。鎮撫蒲和 日記立」

と讀まれた。鄭和がイスラム教徒だつたことは今ではよく知られているのであるが、問題はこの碑を建てた蒲和と云う人物のことである。蒲壽庚の一族は元朝一代を通じて勢力を振り、閩書(卷一五二畜德志)に「元、壽庚の功あるを以つて、その諸子若孫を官し、多くは顯達に至る。泉人、その黨炎を避くるもの數十餘年。元亡んで迺ち已む。皇朝の太祖、蒲姓の者を禁じ、讀書入仕するを得ざらしむ」とあり、宋元通鑑にも「我が太祖皇帝泉人蒲壽庚、孫勝夫の子孫を禁じ、士に齒するを得ざらしむ。蓋し、其の先世、胡を導き宋を傾くるの罪に縁るなり。故終夷之也」とある。最後の一句は「故にこれを夷に終らしむるなり」と讀み、蒲壽庚が胡を導いて宋を傾けたので、その子孫を中國の士人の仲間に入らしめず、夷人として終らしめたと解してよいかと思う。

張星娘氏が民國十五年に泉州を訪れた際、その地の陳育才(字は澤山)に「現在も泉州に蒲姓のものがあるか」と問うと、「仍有、惟有改姓爲吳者。宋末蒲姓在泉州頗有勢力。當帝昺南奔、蒲姓開泉州城門迎元兵、迫帝昺南奔粵。明初太祖懲罰蒲姓、故改爲吳。現今人口約二百餘、居南門外。無大勢力。泉州南門外塘頭山下、新自永春邊來蒲姓一戶、製香爲業。永春蒲姓人口甚衆、有數千家云」と答えた⁽⁴⁴⁾と云う。これによると泉州には今も蒲壽庚

の子孫がその南門外に残っているが、ただ吳と改姓したものが多らしい。永春縣は泉州から西北に百二十支那里の所にある。ここにも蒲姓が多いと云う。ただし、それと蒲壽庚の子孫との関係は明瞭でない。

靈山に鄭和の行香を記念して碑をたてた鎮撫の蒲和と云う人も、恐らくイスラム教徒であろうが、これと蒲壽庚一家との関係はどうであつたか。明の太祖のとき一門は任官を禁ぜられたと云うのであるが、或は成祖のころに鎮撫位にまで爲つたものが現われたのか、その邊は明確でない。

六

やゝ叙述が傍道に外れた観があるが、波斯灣の海港スイーラーフから泉州に来て、清淨寺を創創した納只卜穆茲喜魯丁(吳鹽清淨寺記)と、同じく泉州城南に居留し、財を輕んじて施を樂しみ、城外の靈山に居留民墓地を作つた番商施那幃 Shilāwi とは恐らくは同一人であつたらうと私は考へる。その根據は前述の如く、時代と出身地と性格が一致するからである。納只卜穆茲喜魯丁を原形に復せば Najib Muzhir ud-Din と云うものかと考へられる。そう云う名前はイスラム教徒には珍らしくはない。故に Najib Muzhir ud-Din ash-Shilāwi と稱したのが、普通は單に「施那幃」と呼ばれたものと見える。そう云う例は枚擧に暇がない。タバリスターン出身の大歴史家 Abū Ja'fari Muhammad bin Jarir at-Tabari (838~923) の如きも通稱は「タバリー」である。

もう一つ岳柯の程史(卷十一)に廣州の蕃商蒲姓のことを述べて、その後に

「泉亦有_二船寮_一、曰_二戶羅圍_一。贊乙_三於蒲_一。近家亦蕩析。意積財聚散自有_レ時也」と云つている。「贊乙_三於蒲_一」とは桑原、

藤田（豊八）二博士の読み方で「資産の點で（廣州）の蒲姓につぐものであつた」と云う意であろう。この戸羅圍も桑原博士の指摘した如く *Shilawi* の音譯であることは疑うべくもない。岳柯が程史を編したのは、前述の如く嘉定十年（一一二七）前後であるとの事であるから、紹興の初めに納只卜穆茲喜魯丁が泉州に来てから、八十餘年目にあたる。ここに戸羅圍とあるは、恐らくは、諸蕃志の施那幃の子孫であらう。泉州のシーラーウィー家は南宋の紹興年間に興り、嘉定年間に至り、三代目か四代目かで家産が傾いたのではないかと想像される。そうして、この一家は、その出身地、名前などから推してイスラム教を奉ずるペルシャ系の人々であつたと私は考えている。

では、泉州のシーラーウィー家の始祖は何時清淨寺を創建したものであろうか。これに就いては、もう一二有力な史料がある。

第一は清淨寺の一部に今も残るアラビヤ語刻文で、第二は藤田豊八博士の示されたシナの史料である。

元來、清淨寺の研究として古いものは一八九六年に通報ツンバに發表された英國の領事 Phillips のもので、貴重な寫真數葉が附してある。しかし、一九一一年に同じ通報に出た西班牙の神父 Greg. Arnaiz と瑞西の Max van Berchem 博士の協力になる一篇は極めて有力な研究である。ファン・ベルヘム氏はフランスのクレルモン・ガノー Clermont-Ganneau の流れを引き、イスラム金石文の研究で卓越した學者であつた。故に直接泉州の地を踏んだわけではなく、安海在住のアルナイス師の現地調査資料を基にして纏めたものであるが、極めてすぐれた成果を示し得たのである。論文の冒頭にファン・ベルヘム博士は「この研究は私が安海に居るドミニック派のアルナイス神父と長く文通した結果の所産で、圖版は同神父と廈門の M. Mencarini 氏の作圖と寫真とに基く。ここに貴重な助言を與えられたコルデイエー、シャヴァン

又兩氏に感謝の意を表明すると共に、私をアルナイス神父に紹介してくれたエルサレムのラグランジュ Langrange 神父に感謝の言葉を述べる」と云つてゐる。これにより、その泉州のモスクの研究は、パレスティナの考古學的研究が機縁となつて生れ出したものであることがわかる。

清淨寺は今では概ね荒廢に歸し、昔の禮拜堂の主な部分は屋根のない廢墟となつてゐる。正面入口から廻廊を抜け、左に轉じて、拜殿に入るが、その廻廊の一部、煉瓦壁の上部に二枚の長方形の石が上下に重ねてあり、それに美しいナスヒー書體のアラビヤ文が刻してある。それは、ヒジュラ後七一〇年（西紀一三一〇—一、元の武宗至大三—四年）にこの寺の重修が行われたが、その際に刻して、アーチの上方に嵌入したものである。

「實にこれは、この地方最初の民衆のためのマスジドなれ。この祝福されしマスジドは「古きもの」'Atiq wa'l-Qadim とよばれ、また別に大伽藍 (Jam'iu' または Sha'ri'u') とよばれ、別に「教友の寺」Masjidul-Ashāb とよむ。こゝは聖遷後四百年（西紀一〇〇九—一〇、宋の眞宗の大中祥符二—三年）に建造されたり。（下略）」

これが刻文の冒頭の部分である。ここで聖遷後四百年と云つてゐるのは、きつかりと四百年なのか、それとも四百年代を漠然とさしているのかよくわからない。

次に、藤田博士が引用された朱文公集卷九八中の傳公行狀の一節がある。傳自得が泉州の通判だつたときのことを述べて

有賈胡、建層樓於郡庠之前。士子以爲病、言_レ之郡。賈貲鉅萬、上下俱受_レ賂、莫_レ肯誰何。乃群訴_ニ于部使者、請_ニ以屬_レ公。使者爲_レ下_ニ其書。公曰、是化外人、法不_レ當_ニ城居。立戒_ニ兵官、即日撤_レ之云々

と云つてゐる。右につき藤田博士は「當時蕃商は公には城外に居留し、しかもその富みて力ある城内に雜居せしものも少なからざりしが如く、遂に上下に賄して郡庠即ち郡學の前に層樓を建つるに至りしもの如し。而してその建てられんとせしもの層樓にして、その地の郡學の前若くはその附近なるに於いて、予輩は之を以て有名なる清淨寺なるべしと信するものなり。固より「立戒兵官即日撤之」といへど、已に上下に賄せるに於いて、稍々その位地を變じ、遂に今の清淨寺の基礎を置きしに似たり」と云い、更に傳自徳は宋の政和六年（一一一六）の生れで、納只ト穆茲喜魯丁が渡來して清淨寺を建てたと云う紹興元年には十六歳に過ぎなかつた。十六歳で通判になるものとは思われぬから、

「されば清淨寺創建の紹興年間に在りといへるは或は信すべきも、紹興元年に在りといへるは信すべからず。況んや眞宗時代に在りといへるをや」と云つて、ヒジュラ後四百年の創建説、紹興元年の創建説、双方を否定して⁽⁴⁸⁾いられる。この説は妥當と私は考えるものである。清淨寺のアラビヤ語碑文の年次は「ヒジュラ後四百年代」と云う位の漠然たるものである。紹興元年は納只ト渡來の年であろう。清淨寺創建は、それから三十二年に亘る長い紹興年間のある時期であろう。林之奇が泉州に赴任したのも、その官途の最後のものであつたらしいから、紹興の初めとは思われぬ。故に清淨寺創建のはつきりした年次は不明であるが、大體紹興二十年（一一五〇）を中心としてその前後にそれぞれ十年位づゝまたがつた時期の間のことではあるまいか。

ただし傳公行狀に層樓とあるが、これは、ミナーラ、即ち光塔のことではなかつたかと思う。清淨寺そのものは、アルナイスの送つた圖を見るに（もつとも元代に大改修が行われたのであるが）一階建てである。しかし、乾隆泉州府志（卷十六、壇廟寺觀）によると「清淨寺舊く塔有り。萬曆間住持夏東升等修す」とあつて、明の万曆ころまで光塔の

あつた事を知り得る。陳万里氏も「本來、木塔あり。隆慶間毀去す」と云つて⁽⁴⁹⁾いる。その事實から推して紹興年間創建の時も、寺と共に層樓、即ち光塔を建てたのを、府學の前だと云う理由で、塔だけ撤去せしめたのではあるまいか。乾隆泉州府志(卷十、橋渡)の清淨寺橋の條下に「(清淨)寺中に在り。即ち府學の前なり。……按ずるに隆慶志には禮拜寺橋に作る」とある。アルナイスの地圖(通報一九一一年號所載)に見るも、寺(モスク)の境内を小川が流れており、それに橋がかかつているが、これが清淨寺橋であろう。即ち、清淨寺の位置は初めと同じく府學前にあつて、移動したものと⁽⁵⁰⁾は思われぬのである。乾隆泉州府志(卷七五、拾遺上)に元の至正九年に修復されたことを述べて

舊物徵復、寺宅鼎新、層樓聳秀、峙郡岸前、東壯青龍左角之勝、衆大悅。

とあるを見ると、元代の修理の際、再び光塔が建てられた如くである。これが前述の如く明の万曆年間(一五七三—一六一九)に修理されたものであらう。陳万里氏が「清淨寺……本來、木塔あり。隆慶間(一五六七—七二)に毀去す」と云つてゐるのは何に基いた説であるかわからないが、乾隆晉江縣志(卷十五)には「隆慶丁卯木塔壞」とある。恐らくその事であらう。何れにせよ現在ではこの塔はすでに見られないのである。

七

泉州にペルシヤのスイラーフの出身であり、人種上からもペルシヤ系と思われる戸羅圍家が榮えたが、その事蹟中今も残るのが靈山の叢塚や、清淨寺であるとしてよからう。

この一族が衰えて、これに代つて勃興し、同地の外國居留民間に勢力を振つたものが蒲壽庚一家であると私は考えて

蒲壽庚一族勃興の事情は桑原博士の研究によつて詳細にされて、今更に蛇足を加える必要も餘地もないのである。心史や閩書によれば、その祖はもと廣州の蕃坊の長をも務め、兩廣第一の富豪だつたが、壽庚の父開宗のとき、泉州に移つた。前述した如く、桑原博士は、蒲壽庚の祖と、岳柯が程史で傳えた廣州の蒲姓とは相通するものと考えられ、蒲開宗の泉州移住と、蒲姓の衰運とは關係があるかも知れぬとされた⁽⁵¹⁾。これは、誠に妥當な説と思われる。大體、十三世紀の初め、嘉定十年（一二二七）即ち、わが朝の慶政上人が、泉州港上でペルシヤの商人と會談した年を距ること遠からぬ時代に、泉州移住が行われた。最初は左程豊かな生活を營んだものとは想像出來ぬが……と桑原博士は云われている。ともあれ、南海名物の海賊が泉州を襲つたとき、蒲壽庚及びその兄壽成等は、支那官憲を助けて、これを撃退し、それが出世の端となつて、宋朝の登庸を受け、遂に壽庚は泉州の提舉市舶となつたのである。

桑原博士は、右の出來ごとは、理宗の淳祐年間（一二四一—五二）のこととなければならぬとされている⁽⁵²⁾。そして「蒲氏兄弟が海賊を撃退するに至りし事情は詳ならず。想ふに海賊の跋扈は、支那官憲にとりても、蕃商にとりても、共同の敵害なれば、當時泉州在留の蕃商は支那官憲を援け、而して蒲氏兄弟は蕃商の海船を引率して、大功を建てしなるべし。曩に紹介せし如く、泉州在住の蕃商は贖金して、支那官憲が海岸警固の戦艦を造るに助力せし程なれば、支那官憲の依頼に應じ、或は自ら進んで支那官憲を援けて、海賊の討伐に従ふも、寧ろ有り勝の事なるべし」と論じられた。これも頗る妥當な論と思う。宋代に泉州居留の外人達の中心となつたのは、紹興年間から嘉定年間、即ち十二世紀の三〇年代から十三世紀の初期ころまではペルシヤ系の戸羅圍家であつたが、これが衰え、代つて、廣州から移つて來た蒲

氏が中心となつたのであろう。兄の壽宥は策謀に長け、寧ろ陰の人物として壽庚を指圖した。壽庚の方は閩書(卷百五十二)に「少くして豪俠無頼」と云われた如く、性豪愎、衆の統帥に適していたのである。

蒲壽庚が泉州の提舉市舶となり、閩書(卷百五十二)によれば福建安撫沿海都制置使をも兼ね、一方では蕃商を統べ、また海舶の總取締りに當つている間に、元の世祖は大將伯顔をして、宋の行在臨安府を陥れさせ(一二七六)、徳祐帝は降服した。宋の遺臣は景炎帝を奉じ、福建に退いて恢復を圖つたが、同帝から福建廣東招撫使に進められた蒲壽庚は、その年十二月、突如宋に裏切つて元軍に内應した。

翌年、宋朝の遺臣張世傑が泉州を攻めると、蒲壽庚は泉州居住の萬餘人と算せられた宋室の一族を擧殺してその地を固守し、元朝の東南部平定を助け、宋の幼主祥興帝の滅亡を早からしめたのである。

故に元朝は大に蒲壽庚一族を優遇し、壽庚は閩廣大都督兵馬招討使に、ついで至元十五年(一二七八)八月には福建行省の中書左丞(正二品)に登庸された。そして至元二十一年(一二八四)後間もなく世を去つたらしいと桑原博士は論じている。⁽⁵⁵⁾ また、その一門は前述した如く元一代を通じ福建地方に大なる勢力を振つたのである。

x

x

x

x

一方、泉州、即ちザイトウインの繁榮は目ざましく、元代には正に世界最大港の一として殷賑を極めた。

マルコ・ポーロは、その父ニコロ、叔父マフェウと世祖の至元廿八年(一二九一)ころ、十七年間に亘る禹域の滞在を終り、泉州港から船出して歸國した。そしてこの very great and noble city of Zaiton は世界最大の港二つの内の一つで、あらゆるインドの貿易船が頻繁に入港して、香料その他高價な物品を輸入する。アレクサンドリヤその他の

港に、胡椒船一隻が入り来るのに對し、ザイトンの港には百隻いなそれ以上の胡椒船が入り来るであろうなどと云つてゐる。

西紀一三二三年から二七年にかけて元朝のシナを訪れたフランシスコ派の僧 Odoric of Pordenone (イタリア人) も Sinkala (廣州) から町々を越えて Zayton と呼ばれる noble city に至つたと云つてゐる。そこにはフランシスコ派の僧院二ヶ所があり、また人間の生活に必要な物資は豊富で、三ポンド八オンスの砂糖が半グロート以下で買える。町はポロニヤの倍位あつて、多くの佛寺があり、その一つを訪れた所、三千の僧と一万一千の佛像があつた。……この地は世界でも一番良い所の一で、食糧の點でも最も恵まれていると云う様な記録を残してゐる。⁽⁵⁶⁾

一三四七年にアヴィニヨンの法王廳の使節として、元の順宗のもとに來たマリニョルリ Marignoli も大都 (北京) を訪問後、泉州から海路故郷に歸つたが、泉州は驚歎すべき立派な海港で、市街の廣さは信じられぬほどであると云つてゐる。⁽⁵⁷⁾

一三五五年ころ、この地を訪れたらしいモロッコのイブン・バットウータ Ibn Battuta も、「Zaitun は世界の最大港の一つであろう。いな、むしろ唯一の最大港と云う方が妥當であろう。自分はこの港に百艘の大型ジャンクが集るのを見た。その小型のものに至つては無數と云うべきである」と云つてゐる。イブン・バットウータの如き、當時の文明世界を殆ど隈なく見て來た人にしてこの言がある所から見ても、泉州港の盛大さが思いやられる。

右の如く世界的の大海港であつて見れば、元代の泉州は一種の國際都市で、各國の商人や船乗りが來ていたに違いないが、しかも、その居留外國人の主力を爲したものは、宋代から引つづきペルシヤ人であつたらうと思われる節が多い。

例えば、かの清淨寺に就いて見るも、このモスクは武宗の至大三年(一二三〇)ころと、順宗の至正九年(一三四九)の二回にわたつて修復された如くであるが、その關係者は宋代の創建のときと同様にペルシャ人だつたらしいのである。武宗の至大三年の修築のことを告げているのは、前にも引用した清淨寺の楣間にあるアラビヤ語碑文で、創建後三百年を経て、大修理を加えられたことを述べ

「この高きアーチ *tāq*、宏壯な廻廊 *riwāq*、堂々たる門 *bāb*、新しき窓 *shubbāk* などを造る。その年次はヒジュラ後七百年(一二三〇—一一)にて、いと高きアツラーの御満悦を求むるハージ、ルクヌ・(ウツ・ディーン)アツ・シーラージ *Hājī Rukn (ad-Dīn) ash-Shirāzī* ことアハマッド・ビン・ムハツマド・アル・クドスィー *Ahmad bin Muḥammad al-Qudsi* によれり。アツラーよ、(豫言者)マホメットとその一族を介して、彼(アハマッド)と彼に助力せし人々を許したまわんことを」⁽⁵⁸⁾とある。

このアハマッドの出身地を示すと思われる名が二つ現れていて、一つは *al-Quds* 即ちエルサレム、もう一つはペルシヤの名邑シーラーズである。マクス・ファン・ベルヘムはエルサレムの方は、そこに滞在または巡禮をしたと云うだけの因縁であり、シーラーズがその生地であろうと考えている。そしてこの碑を以つて、今まで発見されたものの中ではシナに於ける最古のアラビヤ語碑文であるとして⁽⁵⁹⁾いる。この人物のアラム *alam* 即ち歐米人のクリスチャン・ネームに當るものがアハマツドで、「ムハツマドの子」と云うのはクンヤ *Kunya*、ハージと云つたことから、メッカに正式巡禮を行つた人であることがわかり、出身地はペルシヤのシーラーズ、そしてエルサレムにも巡禮または滞在した人であろう。ルクヌッ・ディーン(信仰の柱)と云うのは敬稱 *Iakab* である。シーラーズ出身と云う所から見ても、これも

またペルシャ人であろうと思われる。碑文にアラビヤ語を使用してゐるのは、宗教、學術關係等の文書にはペルシャ人も後々までアラビヤ語を使用したため、丁度、わが國で漢文が使用された状態によく似ている。アラビヤ語古典中にペルシャ系の著者が重要な部分を占めていることは、アラビヤ文學史、ペルシャ文學史上に顯著な事實である。

次に至正九年重修の事情を傳えるものは、吳鑿の清淨寺記で、前に引いた創建のことを述べた條の次に

後以沒塔完里阿哈味不任、寺壞不_レ治。至正九年、閩海憲僉赫德爾行^{メグリヤ}部至_レ泉。攝思廉夏不魯罕丁、命_ニ舍刺甫丁哈悌卜_一領_レ衆分_ニ訴憲公_一。任達魯花赤、高昌楔玉立_ニ至_一。議爲_レ之徵_ニ復舊物_一。衆志大悅。於是里人金阿里願_ニ以_ニ已貲_一一_ニ新其寺_一、徵_ニ余文_一爲_レ記。其略如_レ此。

とあり、更にその次に「碑末に言う夏不魯罕丁は年一百二十歳、博學にして才徳あり、精健中年の如し。其の攝思廉と曰うは猶、主教と云うが如きなり。其の沒塔完里と云うは猶、都寺と云うが如きなり」としている（閩書卷七）。沒塔完里はアラビヤ語（ペルシャ語中にも入つてゐる）Mutawalli と Steingass のペルシャ語辭典には Superintendent or treasurer of a mosque; an administrator or procurator of any religious or charitable foundation; a prefect, governor.

などと解釋している。閩書に「都寺」と譯したのは適譯である。阿哈味は Ahmad で、至大三年の修理者と同名。私は恐らく同一人物かと考える。同一人にして一旦修理しながら、また荒廢せしめたのには特殊な理由があつたのであろう。赫德爾はヒヅル Khidr の音譯らしく、イスラム教徒によくある名であるから、恐らく西域系のトルコ人かイラ

ン人であろう。攝思廉は主教の義だとあるからシャイフル・イスラーム Shaikhul-Islam でムフティー Mufti と大體同じもの。これがイスラム教徒居留民團のいわば精神界の首長であり、その下に宗教儀式などを主宰するイマーム Imam またはハーティブ Khatib (哈梯卜)、宗教法によつて裁判にあたるカージー Qadi が居つた。これに對し實業方面の首長としてはシャイフ・スーク Shaikhul-Suq (市場の長老の義) が居り、これを助けるにナキーブ Naqib と云う役人が居て商人や職人關係の事務をとつた。こう云う組織は廣州や泉州、占城など、イスラム教徒の居留地ではどこでも同様だつたと云われている。⁽⁶⁰⁾

張星煊は夏不魯罕丁をイブン・バットウータの旅行記に出てくる Shaikh Burhān ud-Dīn al-Kazirūni のこととしてゐる。⁽⁶¹⁾バットウータは曰く

「その地(ザイトウーン)の高貴なシャイフ(長老)等の中にブルハーヌッ・ディーン・アル・カージルーニーがある。この人は市の郊外に草庵を持つてゐるが、商人達はカージルーンのシャイフ・アブー・イスハーク Shaikh Abu Ishāq への供物を、この人に供えてゐる」⁽⁶²⁾

カージルーン Kazirūn と云う町は、これまたペルシャのファールス地方にあり、西紀十世紀の後半からシャープール地區の主邑となつた。シーラーズから西に向つてペルシャ灣岸に出る街道に當つていて、その名は元代には極東地域まで知られていたと見え、元史地理志にも「可咱隆」と云う形で載せられている。(經世大典西北地圖も同じ)

アブー・イスハークとはその地で歿した聖者の名で、海上鎮護の靈として信仰されること、あたかも福建地方の媽祖の如きものであつたらしい。墓のほとりに僧院があり、イブン・バットウータもそこに三泊したと物語つてゐる。すべ

ての旅人を款待し、三泊が最少限で、それより短かくして出發することは許さない。僧院には百人あまりのファキール *faqir* 即ちイスラム托鉢僧が居り、旅人のために、アブー・イスハーク聖者の墓の側でコーランを誦し、祈禱をしてくれる。聖者の崇拜者はインドやシナにも多數居つた。東洋に航海する人々は暴風や海賊の難を恐れ、アブー・イスハークに對し、書つけを以つてしかじかの供物を約して、保護を祈る。無事目的地に着くと、その地に居る僧院の代表者が船に來て、約束の供物を受取る。またシナやインドから、ペルシャ灣に向う船は、皆、これに拂う金を用意していた。或はまた旅僧（ファキール）がアブー・イスハークの僧院に行つて布施を乞うと、僧院長は朱印をおした書つけをくれることがあつた。この書つけを持つて港に行けば、到來の船から、その指定範圍内の金額を受取ることが出来たと云う。清淨寺が重修されたのは西紀一三四九年ころで、イブン・バットゥータの泉州訪問の年（一三五五）と接近しているから、清淨寺記の夏不魯罕丁と、バットゥータの傳えた *Burhān ud-Dīn* とを同一人とする説は決して無理ではない。清淨寺記に「年一百二十歳、博學にして才德あり」とあるのと、カージルーンの僧院の代表者として、泉州郊外に庵を結び、蕃商や船乗りから供物を受取つていたと云うことは、どこか特徴の共通さを思わすものがある。恐らくスーフイ（神祕主義派）の行者の如きものであつたらう。こう云う人々には百數十歳はおろか、數百歳と稱したなどと云う話も珍らしい事ではない。しかし、尙、考究すべき點も残つてゐる。即ち乾隆泉州府志（卷七五上、拾遺）に「閩書抄」として、この人の略傳を擧げている。それによると

夏不魯罕丁者西洋嗜嗜例綿人

とある。イブン・バットゥータの云うブルハーン・デイーンはカージルーン即ちカージルーンの人とあるが、こ

ここに嗜嗜例綿人と云うのは、どこを指すものであろうか。これに就いて私は淺學にして何の解釋も下し得ないでいる。その後文に

皇慶間(一三二二—一三二三)隨貢使來泉。住排舖街、脩回回教。泉人延之住持禮拜寺。寺宋紹興創也。(中略) 宋元之際、寺壞不治。至正九年夏不魯罕丁與金阿里謀、出已貲修之。(中略) 當是時夏不魯罕丁年踰百有一矣。精健如壯歲。故是役也猶爲政。(吳)鑿稱其博學有才德。衆奉以攝思廉。攝思廉即華云主教也。罕丁皇朝洪武三年庚戌乃終去。至正巳丑又二十二年。蓋壽百四十二歲云。夏敕大師不魯罕丁子也。習回教繼其業亦壽百一十歲。とある。これには、不魯罕丁の初めて泉州に來た年次から、明の洪武三年(一三七〇)まで生きていたこと、及びその子夏敕大師のことまでを傳えている。夏敕大師とは、哈的大師などと同じく、回々人中の役名を意味するものではなかつたろうか。桑原博士は元史(卷百二刑法志、職制上の條)、元曲章(卷五十三、刑部、問事の條)にある哈的大師の事を指摘された。(蒲壽庚の事蹟、頁一〇五)福建地方の回々人の行政を統べたが、後に禁止して蒙古官憲の手に收めたとある。哈的とはイスラム社會の裁判官 Qadi に似た様でもあるが、音はやくことなっている。音から云えば、メッカ巡禮を終えた人の義の Hajj の方にむしる近いであろう。

父の夏不魯罕丁がシャイフル・イスラームに推されたことは前文にある如くであるが、イブン・バットウータは泉州のシャイフル・イスラームとして別人の名を擧げている。

即ち、ザイトゥーン到著の際のことを述べて「イスラム教徒は別に離れた街に住んでいる。私は到著の日に、そこで、かつて使節として、贈物を持つてインドに來たアミール(將軍、高官の稱)と邂逅した。彼も私達と一緒に出發したのだ

が、そのジャンクは沈んでしまったのである。彼は私に挨拶し、私のことをサーヒブル・ディーワン *sāhibu'l-diwān* (これを *Defrémercy* と *Sanguinetti* の譯本には *Chef de conseil* と譯しているが、イブン・バットウータはディーワンを税關の意味に屢々用いているので、泉州の提舉市舶を指しているものと私は考える) に知らせた。すると(税關長)は私を美しい家に泊めてくれた。それから私の所にイスラム教徒の裁判官 (*qāḍī'l-muslimīn*) タージュ・ディーン・アル・アルドウイーリー *Tāj ud-Dīn al-Arduwīlī* が來た。この人は徳高く寛仁な人である。またシャイフル・イスラームのカマルツ・ディーン・アブドゥッラー・アル・イスファハーニー *Kamal ud-Dīn 'Abdullāh al-Isfahānī* が來た。極めて敬虔な人物である」と云つて⁽⁶⁴⁾いる。これで見ると清淨寺の修理とイブン・バットウータの訪問との間の時期にブルハヌツ・ディーンはイスラム教長の位置を退いて、カマルツ・ディーンに譲り、自身は草庵にひきこもつたと解するか、バットウータの記録は誤りだとする外はない。ここで注意すべきは法官(カージ)の任にあつたタージュ・ディーンはアルダビール *Arḍabil* の人であり、カマルツ・ディーンの方はペルシャの名邑イSPAハーン(イスファハーン)の人であつた事である。イSPAハーンに就いては説明を要しないが、アルダビールは十世紀ころにはアザルバイジャンの首府であつた。西紀一二二〇年に蒙古軍の攻略を受けて廢墟となつた。しかし、また復興し、十四世紀には、首府ではなかつたが、昔の繁榮の大部分を回復し、十六世紀に入ると一時サファヴィ王朝の都となり、ペルシャ全土の首府となつたと云⁽⁶⁵⁾う。

出身地から見て右の二人ともペルシャ人と見るのが妥當であらう。

次に清淨寺記には舍刺甫丁哈悌卜なる名を擧げている。張星煥氏は舍刺甫丁を *Sherif-uddin* とし、バットウータ遊記

に見ゆ」としている。⁽⁶⁶⁾ イスラム教徒によくある名前に *Sharaf ud-Din* と云うのがあり、舍刺甫丁と音がよく符合する。イブン・バットウータは前掲の文の續きに「それから私の所へ主だつた商人達が來たが、その中にシャラフツ・ディーン・アツ・タブリーズィー *Sharaf ud-Din at-Tabrizi* が居つた。彼は私が印度に到著した時に金を貸してもらつた商人達の一人で、そのやり方は一番立派であつた。彼はコーランを誦じ、多くの書を讀んでいる。これらの商人は、不信の徒の國に住んでいるから、たまたまイスラム教徒が來ると、心から悦んでしまい「イスラームの世界から來た人だ」と口々に云つて、ザカート（施物）として財寶を頒ちあたえる。そこで（旅人は）それら（商人）の一人ほどにも金持になつてしまふ」と云つている。

清淨寺碑の方には「舍刺甫丁哈悌卜」即ち *Sharaf ud-Din Khatihb* としてある。ハーティブはスタインガスの辞典（ペルシヤ語）に *a public speaker, an orator, a preacher* などと説明してある。シャイフル・イスラームを助けて、宗教上の儀式などを指揮するものである。もとこの人は商人であつたが、よくコーランを誦じ、多くの書を讀んでいたなどとイブン・バットウータが言つている所から見ても、泉州のイスラム教團中の學識者として、ハーティブの役目をも勤めていたものであろう。これに類したことは現在東京に居るイスラム教徒團の間でも見られる現象である。

さてこの人の出身地はイブン・バットウータによればタブリーズであると言ふ。この町はウルミヤ湖の岸から東方約三十哩の所にあり、九世紀ころから發展し、十三世紀初めにはアザルバイジャンの主邑となつた。蒙古軍が一二二一年に占領したが、多額の金を拂つたため劫掠を免れ、イル汗國時代にはその首都の位置に登つたのである。ことにガーン汗以來壯麗になつたらしい。⁽⁶⁷⁾ 故にシャラフツ・ディーンも勿論ペルシヤ人と見てよいであらう。

ユールもこの事に注意し、ギブン・バットウータがシナの他の都市で會つたイスラム教徒はソグディアナ、メソポタミア、エジプト、モロッコ等の出身者で、ペルシャ本國から來たものは無かつたのに、泉州で會つた人々は悉くペルシヤ人であつたことは大變に興味の深い事であると云つてゐる。⁽⁶⁸⁾

この場合、重修を援けた高昌の楔玉立はウイグル人で、宋代の眞德秀と竝んで頗る治績を擧げた人であつた。吳鑾を招聘したのもこの人で、鑾はその保護の下に「清源續志」二十卷を完成したと云うが、⁽⁶⁹⁾惜しいことに今は傳わらぬ。

八

泉州の清淨寺のものと拜殿は、現在では四面の壁と礎石などを残して概ね廢墟となつてゐる。張星烺氏が訪れたときは「院内穢汚堪えず。現に賃して回教徒に與え屠牛場と爲す」と云い、陳萬里氏も「空場は牛を牧し、西北隅は牛皮硝洗の處となる。狼籍堪えず」と云つてゐる。⁽⁷⁰⁾それでもこの禮拜堂の北方（正門は南に向いてゐるから、裏手に當る）に小さなモスクを建て、これが現在の泉州の回教徒の禮拜堂になつてゐるのである。泉州の回教徒、いな回教徒のみならず泉州そのものが昔日の儂はないので、昔の様な宏壯な禮拜堂を維持も出來なければ、必要ともしていないのである。陳萬里氏はこれを後堂とよび「同治年間提督江長貴の重修する所にかかる。堂中亞刺伯文の石刻極めて多し。また零碎の石刻あり、堆んで廊沿下に在り」と云つてゐる。⁽⁷¹⁾

この部分も幸いにアルナイス神父が調査し、寫眞や拓本をマクス・ファン・ベルヘム博士に送つてゐる。博士曰く「古代の聖殿の北方、モスクの敷地内に長方形の家があつて、前方に二つの露天の庭をひかえてゐる。家屋は二本の

圓柱に支えられている。十四世紀の聖殿は荒廢し、他の用途に宛てられているので、現在モスクに使用されているのは、この家屋の方である。狭いものであるが、少數に滅じたイスラム教團にとつてはこれで足りている」と。そしてこの壁に嵌入されてある刻文は、管寺の言によればもとモスクの敷地内の地中から掘り出されたものであると云うが、その多くは十四世紀の墓誌であつた。

その一つは Sa'id ad-daulah wa'd-din と云う人の墓碑である。詳しいことは解らぬが、書體や裝飾によつて判断すれば十四世紀のものであらうとファン・ベルヘムは云つている。

第二はハディージャ可敦 Khadijah Khatun と云う婦人の墓誌で、主長(Sadr)ミーヌッ・ディーン Mu'in ud-Din の娘であると云う。ファン・ベルヘム博士はその出身地などを判讀しようとしたが成功しなかつた。「多分その父はイスラム教團の長だつたらう」と云つている。この墓の主の婦人が歿したのはヒジュラ後七三六年(西紀一三三五)とある由であるから、第一回修理と第二回修理との中間に當る。イブン・バットウータが來たときは、勿論在世していなかつたわけである。

第三のは Bahā' ad-Din 'Umar bin Ahmad al-'Alami (or al-'Iimi) at-Tabrizi のもので年代はヒジュラ後七六四年(一三六二—六三)であるから、この人は丁度イブン・バットウータが來た時在世して居つた。或はバットウータと會つたかも知れぬなどと想像される。そして、これもタブリーズ出身でペルシヤ人らしい。

第四のは Shams ud-Din Muhammad bin Rukn (or Zain) ad-Din at-Tabrizi と云う人で、年代ははつきり讀めぬと云う。それにしても、これも出身地はタブリーズで、ペルシヤ人だと思われる。

ファン・ベルヘム氏はこれらの墓誌は、皆モスクの敷地内から出土したと云うのであるから、十四世紀ころには、境内に泉州のイスラム教徒の墓地があつたのであろう。組織的に發掘したら面白い發見があるかも知れぬと云つて(72)いる。これまで列擧して來た日本やシナ側の史料にせよ、イブン・バットウータの記錄にせよ、また清淨寺に残る遺物にせよ、具體的に判明する宋から元にかけて泉州に在住したイスラム教徒は殆ど悉くがペルシヤ人と思われるものばかりであつて、他の國人である事を示すものは一つとしてない。しかし、こう云う例はこれのみに留まらぬ。もう一箇所、靈山の回教徒墓地を注意しなければならぬ。

靈山の回教徒墓地の調査はまだ不十分であるが、その中心をなす、いわゆる回教先賢塚の主たるメデイナ國の二聖人のことなど多分に傳説的で、實は、宋代の尸羅圍と呼ばれた家の人々などを葬つたものかとも思うが、ここでは細論を避けることにする。

x

x

x

x

アルナイス神父は靈山の先賢塚から少しく下つた所で二面のアラビヤ語碑文を發見した。その一つは下部が失われて、僅に五文字を残すのみであつたが、ナスヒー書體で割合に讀み易く刻してあり、ファン・ベルヘム博士は次の如く讀んでゐる。

Hādhā qabr khudhādār (or khudhādād) an-nasrāni al-ganjāyi

右のうち khudhādār は確に khudādār (Théodore または Déodat のペルシヤ語の形)であるとし「この墓はガンジヤーの人、キリスト教徒たるフダーダール(のもの)……」と解したのである。ガンジヤーはアラビヤ語地理書に

は Janzah として出てくる。カスピ海岸のバクーから西の方アルメニヤに向う途中、グクチャ湖の東方にあつて、今では Elizabetpol の名でよく知られている。その邊をアツラーン Arrān 地方と云う。アルメニヤとも關係が深い所であるが、名前から見て、これも恐らくペルシャ人であろう。またこの墓の主がキリスト教徒であることは特に注意すべきである。ファン・ベルヘム博士は「これにより、キリスト教徒のコロニーでも、その死者はイスラム教徒と同じ墓地に葬つたものと見える」と云つて⁽⁷⁴⁾いる。

九

フランシスコ派の修道士オドリコ Odorico は北イタリアのフリウリ Friuli に生れ(一二八六)、西紀一三二六から一八年の間に故郷を出發、インド、シナを巡歴し一三三〇年に故郷に歸り、その次の年に歿した。普通ポルドノーネのオドリック Odoric of Pordenone と呼ばれている。一三二四又は二五年(元の晉宗の泰定元—二年)ころ、廣州から多くの町々を過ぎて Zayton に入つた。曰く

I came to a certain noble city which is called Zayton, where we friars minor have two houses; and there I deposited the bones of our friars who suffered martyrdom for the faith of Jesus Christ.⁽⁷⁵⁾

また同じくフランシスコ派の修道士アンドレア Andrea (Andrew) はイタリアのペルージャ Perugia の人、一三二八年に北京から泉州に移り、同二十二年にはその地のビショップとなつた。二六年正月に故郷ペルージャの僧院長に手紙を送つたが、その中で「山海万里にへだてられ、この書信も御手もとに着くものとも思い難し……」と云い、我々一

行は千辛万苦の後一三〇八年に大汗皇帝の都カンバリック（大都……北京）に着いたと記している。

「大海の岸邊に大きな都會があり、ペルシャの言葉で *Naitun* と呼ばれている。この都市にある富裕なアルメニヤの貴婦人が、宏壯で善美な教會堂を建てたが、これが大司教その人の御思召により大伽藍カソビドラルに昇格された。かの貴婦人はこれを司教ジェラルド修道士と、彼と共に居た修道士達に托し、彼女の生前には十分な寄進をしたし、その死に臨んでは遺贈をした。それでジェラルドはこの伽藍の最初の住持となつたのである」

ジェラルドが歿して、その地に葬られると北京の大司教は、アンドレアをその後任者にしようとしたが、これに應じなかつたので、司教ペレグリーネ *Peregrine* をこれに任じた。ペレグリーネは泉州に赴任して數年、一三三二年の七月に他界した。

「その逝去の四年ほど前に、ある理由によつて大都に居るのが不愉快になつたわたくしは、かのザイトウインの町で、皇帝からのアラファ（手當）を受ける許可を得た」

懇請によつてその許可を得、皇帝から許された八名の騎士と共に旅途につき、至る所で禮遇されつゝ目的地に向つた。「到着すると、前に述べたペレグリーネ修道士がまだ在生中だつたので、わたくしは、町の外、四分の一マイルほどにある、とある林の中に、快適な美しいチャーチを建てるようにたのんだ。そこには二十二名の修道士に充分なあらゆる設備と、それぞれ、あらゆる階級の教會の幹部にふさわしい様な四つのアパートメントが設けてあつた。この場所にわたくしはずつと住んだのであるが、その費用は前述した所の皇帝からの施與に頼つた。その額はジェノアの商人達の見積りによれば、年に一〇〇金フロリン位にあたることである。この手當ての大部分をわたくしはチャーチの建

設に費したが、わが故郷の修道院中、その優美さあらゆる快適さでこれに較ぶべきもののあるを知らない。

それから、ペレグリーネ修道士の歿後間もなく、大司教からわたくしを前記の大伽藍の住持とする旨の命令を受けた。今はわたくしもこの任命に十分な理由を以つて同意した。それで、このごろはわたくしは、或時は市中の家または教會に住み、或は郊外の自分の僧院に住むなど、自分の都合のよいようにしている」

「幸いにして自分は健康であるから、尙數年は働き續け得るかも知れぬが、しかし體質の弱いことと、年齢のため頭髪はもう白くなつた」と云い、「この廣大な帝國には、あらゆる民族、あらゆる宗教宗派の人々が居つて、皆、自由にその信條を奉ずることを許されている。それは何人もその人々本來の宗教によつて救いを求め得ると云う意見、いな寧ろ謬見によつてゐるからである。とは云え、我々も何の妨害も受けず布教する自由を得ている。ユダヤ教徒やサラセン人中から改宗するものは本當に一名もないけれども、偶像教徒は多數洗禮を受けた。けれど本當の所、洗禮を受けたものの中にもキリスト教の道を正しく歩まぬ者が多い。

われらの同胞四人がインドで、サラセン人の手にかかつて殉教の運命に遭つた。一人は二回まで猛火の中に投げ入れられたが、微傷も負わずに出て來た。それでも、それほどに驚くべき奇蹟が行われたにもかかわらず、ただ一名のサラセン人さえその誤れる信仰から改宗しなかつたとは！」

と云い、終りの所で、「われらの主クレメント法王がカンバリックやその他の所に任命された副司教達はことごとく天なる主のみもとに平和のうちに去つてしまつた。そしてわたくしひとりが残つてゐる」と記してゐる。⁽⁷⁶⁾インドのタナで四人のキリスト教徒が殉教したのは一三二一年で、ポルデノーネのオドリコはその遺骨を托され、それを抱いて、

泉州に來、そこに依托して去つたと云うから、恐らくアンドレアその人に殉教者の骨を托したものと思われる。アンドレアもオドリニコから聞いた所を、この書翰にしたためたものであろう。この事は既にユールも指摘している。⁽⁷⁷⁾

右に引用したアンドレアの書翰中で注意すべきは、泉州のことを「ペルシャの言葉でザイトンと呼ぶ」と云つている事である。ザイトンはもと泉州の別稱刺桐城から出た名であるから、ジートゥーンと云われたのであろうが、西域人はこれを自分達に馴染みの深いオリヴの意味に解するようになったものであろうとは前述した如くである。オリヴはアラビヤ語で *zaitun* と云うが、これは近代ペルシャ語に入つている。アンドレアが、ここでペルシャの言葉でザイトンと云うと書いていることは、注意に價する。またアルメニヤの貴婦人が大きなチャーチを建てたとあるが、靈山にあるキリスト教徒の墓の主もガンジャーの人で、アルメニヤに近い所の人であつた。そう云う事から見て、元代の泉州にあつたキリスト教徒のコロニーには、ペルシャの北部やアルメニヤなどから來た人が多かつたのではないか。即ち、ペルシャ系の有力なコロニーがあつて、その主力はイスラム教徒であつたが、その中に若干のキリスト教徒をも交えていたものではないかと私は考えるのである。

西紀一三三八年に南佛アヴィニョンの法王廳に元の順宗の使節が到着した。その一行はフランク人アンドレアほか十五人で、大汗の親書と、その下に仕えるキリスト教徒たるアラン族の首長の書翰を携えていた。このアンドレアは泉州の司教その人だつたかも知れぬとユール氏は云つている。⁽⁷⁸⁾

大汗の親書によれば、これから互に遣使を頻繁にしたい、法王の祝福を送られたい、なお使節に馬や西方の珍奇な品々を持たせて歸して欲しいなどと云つている。

法王ベネディクト十二世は大に喜び、その年十二月、イタリヤ、フロレンスの人マリニョルリのジョヴァンニ *Giovanni de Marignoli* (*John de Marignoli*) 等數十名の一行を答禮使として派遣した。一行は黒海から中央アジアを横断して一三四二年の夏大都(北京)に到着、その献じた馬は元の朝廷にセンセーションを起したらしく、元人の文集にその記録が多く残っている。滯京三、四年、一三四六年或は四七年の十二月廿六日にザイトゥーン(泉州)を船出し、一三五三年にアヴィニョンに歸著した。

マリニョルリの手記によれば

「マンジ(中南支地方)には(杭州などの外)またザイトゥーンがある。驚くべき立派な港で、市街は信じられぬほどの大きさである。そこにわがフランシスコ派の修道士等は三箇所の大變に美しいチャーチを持つているが、極めて豪華で、また優美である。彼等はまた浴場一箇所とフォンダコ *Fondaco* 一箇所を持つている。後者は商人達のための施設(商館)である。彼等はまたいくつかの立派な良質の鐘ベルを持つて居り、その内の二つは私の註文で作られ、*Saracen community* のまつただ中に、本式にすえつけられたのである。その一つを我々はヨハンニーナ *Johannina* と、もう一をアントニーナ *Antonina* と呼ぶように命じた」とある。⁽⁸⁷⁾ ユールは註して、ザイトゥーンのイスラム教徒街の眞中にベルを据えつけたことを、マリニョルリは明かに痛快がつているのである。イスラム教徒はベルを嫌悪し、その支配下ではこのものを許さないと云つて居る。⁽⁸⁸⁾ これによつて見ると、アンドレアの時に二箇所になつたキリスト教會堂は、マリニョルリが來たときは三箇所に増して居り、そのうちの二箇所は、イスラム教徒街の眞中にあつたらしい。泉州のイスラム教徒街には、キリスト教徒も雜居していたと見てもよいと思うのである。

右の如く元代には相當數のクリスチャンが居つたので、その遺物も若干發見されている。その一例は靈山のキリスト教徒墓石や、明代以後、泉州城の内外で發見された四、五の石の十字架である。これについては既に先人の研究が備つてゐるから、私として加えたいことは極めて僅しかない。例えば A. C. Moule: *Christians in China before the year 1550*, London 1930. の第三章の *The Zaitun crosses and other relics* と題するものがあつてよく要領をつかしてゐる。

その内三つは明の崇禎十七年（一六四四）に Emmanuel Diaz が杭州で印刷せしめた「唐景教碑頌正詮」にその木刻圖を入れているものである。

第一は泉州南邑西山（泉州市の西六哩の南安の西南）にあるもので、明の萬曆四七年（一六一九）に出土したもの。「聖架茲古石、置溫陵東畔郊、年代罔知、往來無覩」と次に記してある。溫陵は泉州の古名だと云うから、元來は泉州城東郊にあつたものかも知れない。

第二は、泉州府城、仁風門外三里ばかり、東湖畔の東禪寺から百歩ほどの所の田畔にあつたもの。明の崇禎十一年（一六三八）三月にその地方のキリスト教徒によつて教會堂（聖堂）に移されたとある。第一の十字架も泉州東郊にあつたとすれば、この二つは相距る遠からぬ所、かの靈山の麓にあたる邊にあつたのである。

第三は泉州城内の水陸寺にあつたもの。崇禎十一年に教徒によつてキリスト教會堂に移されたとある。水陸寺は泉州

城内にもとあつた内城(子城)の西門にあたる肅清門の外、その西南方に位置していた。この内城が昔、刺桐の植えられた所であつたが、後にとり拂われ、城壁のあとは街路となつた。それは、外側に羅城がめぐらされて、子城の必要はなくなつたからであらう。乾隆泉州府志によると、水陸寺は唐の天寶六年に勅して祝聖放生池を置き、その上に水陸堂を建てたのに初まる。唐の僖宗の乾符六年(八七九)に時の郡守が水陸院としたが、宋代に郡守蔡襄が禪院に改めた。しかしその後廢されて、都監廨舎、次に添差通判廳とし、更に轉じて南外宋正司として使用された。南外宋正司は桑原博士の示された如く(蒲壽庚一七九頁)泉州在住の宋の宗室の人々を管掌する官衙であつた。泉州在住の宋朝の一族は景炎二年(一二七七)七月ころ蒲壽庚等のために殲滅されたのであるが、それとともに南外宗正司も廢止された。元の至大年間に故址の半を以つて清源驛とし、餘地にまた禪院を建てた。明の洪武年間にこれを水陸寺と名づけたと云う。その後廢されて寺は開元寺の西偏に移され、舊迹遂に亡ぶとある。地圖を見ると開元寺ともとの水陸寺の位置は接近しているのである。

張星煥氏が泉州を訪問した時、セラフィン・モヤ神父に、この三つの石の十字架の行方を訊ね、今も教堂内にあるかと云つた所、「いな、今の教會堂は僅に三十年の歴史を持つのみで、そう云う古物はない。明末清初までは恐らく別の天主堂があつたのであるが、雍正帝の時に教士を驅逐し、堂も破壊された。その位置も知る事が出来ない」と答えた。モヤ神父の教堂はドミニック派のものらしい。もう一つ泉州には新教派の所謂英美耶穌教堂(これは私は福建、台灣に多い長老教會のものではないかと思う)があつて、六十年の歴史を持つていた。張星煥はその教士にも訊ねたが、全く知らなかつたと云つている(泉州訪古記)。十字架石刻は三基とも現在では所在不明なのである。

第四は一九〇六年に、當のセラフィン・モヤ Seraphin Moya が泉州の某寺廟内で發見し、一九一〇年に寫眞をとり、ポール・ペリオ氏が一九一四年十二月の通報誌上に掲げ、「この無限に興味ある遺物云々」と云つたもの。これは前の三つの十字架石のどれとも別のものであるが、その様式には共通點がある。年代、起源の同じものと考えられ、これによつてデイヤスの書に掲げられた木刻寫生圖も相當に正確なことがわかるとされている。

Moule 師は「このことに就いて一九一四年以來、更に推しすすめた何かの説の發表されたことを知らぬ。この石の歴史、發見の明確な場所、現在の運命などについて、もつと明確な事情を知り得ないのは情ないことである」と云つてゐる。⁽⁸²⁾

しかし、その發見場所ははつきりとわかつてゐるし、恐らくは、現在でもそのまゝにあるものと思われる。何故ならば一九二六年に張星煊、陳萬里二氏が泉州城内の奏魁宮と云う廟の中で見たと云つてゐるからである。

陳萬里氏は、これは自分達が新に發見したものであると云つてゐるが、その寫眞（閩南遊記所載）を見ると全くペリオ氏が通報に掲げたものと同じである。奏魁宮と云うのは、清淨寺からさして達からぬ所にあるらしく、陳氏は次の如く記している。（原文は華文）

「十一月四日）午後二時に（清淨）寺を出て、途中奏魁宮に寄つた。東がわの壁上に古代の十字架の石刻があるのを發見した。もと泉州には三つの十字架石刻があつて、光緒十五年湖北崇正書院刊する所の眞福和德理行實紀にそのことが載せてある。（中略、ここでエンマヌエル・デイヤスの書中と同様の説明をした後）今、突然和德理傳には記載してない石刻を一つ見たので、非常な感興を起したのも當然である。一先ず歸つて食事した後、また引きかえして拓本や

寫眞をとることにした。そこで私達は天主堂に歸つて四時にまた奏魁宮に行くつもりだった。ところが意外にも神父(セラフィン・モヤ)が私達に云うには「撮影はよろしい。が、拓本をとるのは人民の反感を惹き起すかもしれない。多くの人が十字架石刻に向つて焼香禮拜に行くから」と。私達はやむを得ず、神父の勸告に従つて、寫眞數葉をとつただけである。その時も觀衆が多勢いたが、一向にそんな風な話はなかつた。一體神父の勸告の裏面にはどんな背景があるのだろうか、怪しく思う⁽⁸³⁾」

この十字架石刻を發見して歐洲の學界に紹介したのは、その當のセラフィン・モヤ神父であつた。陳萬里氏は自分の功の如く誇らかに書いているが、張星煇氏の方はもう少し正直である。張氏によると

「回教古寺の參觀既に畢り、日すでに午を遇ぐ。任神父(華名任道遠、セラフィン・モヤのこと)乃ち余輩を率いて府學街より回寓。路に奏魁宮を過ぐ。また小寺廟なり。其の牆壁上に石刻の小神像あり。像頂に十字架像あり、胸にもまた十字架あり、又兩翼あり云々⁽⁸⁴⁾とある。正しくモヤ神父が二人を案内して指示したものに間違いない。また眞福和徳理傳と云うのは、張氏によると *Travels of Friar Odoric* のことであると云う。

故に決して陳萬里氏の云うが如くに新しい發見ではないが、その所在がこうしてはつきりしたことは面白い。

陳氏の意見のうち、もう一つ面白いのは仁風門外三支那里、東禪寺から百餘歩の所の田畔で發見された十字架につき、その邊がペルーシアのアンドレアが泉州郊外に建てたと云う僧院の位置を示すものかも知れぬと云つている事である。⁽⁸⁵⁾これは或はそうかも知れない。また清淨寺に近い奏魁宮の十字架石は或は元代に泉州城内にあつた大伽藍(Cathedral)か、或はもう一つ後に出來たと云うチャーチの位置を暗示するものかも知れない。それと城内西方の水陸寺附近が問題

となる。

一一

最後に、西アジアの文献に現われる泉州について考察したい、アラビヤ地理學には西紀八四四年から四八年の間頃にイブン・フルダードベエが著した地理書を先頭に十五世紀末ころまでに次々に多數の著述がある。主要なもののみでも數十篇に及ぶが、世界一流の大海港ザイトゥーンの事を傳えたものはなかなか現れず、やつと十三世紀に入つてスペイン系のアラブ人イブン・サイードが僅にその簡単な説明を残したものが最初と思われる。これは泉州が、廣州などと趣をことにし宋以後に國際的海港として發展したためであろう。イブン・サイード、詳しくは *Abū'l-Hasan 'Alī bin Mūsā bin Sa'īd al-Maghribī* と云ふ、西紀一二〇八年（または一二一四年）にグラナダに近いヤハスブ *Yahsub* に生れ、セビーリヤで學んだ。一二四〇年に父と共にメッカ巡禮の旅路に出、同四三年に父とアレクサンドリヤで死別、カイロに滞在した後、バグダードに赴いた。そこで三十六ヶ所の圖書館をめぐつてノートを取つたと云う。バクダードがフラグ汗の蒙古軍に焼き拂われたのが一二五八年であつたから、アツバース朝五百年間の文化の蓄積を利用し得た最後の一人と云つてよい。シリヤ、アラビヤを経て、一旦、チュニスまで歸つて仕官したが（一二五四）、一二六七年には再び東方に旅し、名高いフラグ汗に會わんものとアルメニヤに入つた。同汗のもとに暫く滞在した後、チュニス又はダマスカスで一二八六年或は一二七四年に歿した。地理、歴史、文學關係の著書が數種ある中で、「地表の書、一名地理書 *Kitāb basū'l-ard* または *Kitābu'l-Jagh'rāfiya*」には極東方面の事情も相當に詳しく、ザイトゥーンについては次の

如く記している。

「(ザイトゥーン河の)河口にはザイトゥーンの港があり、シナに行く商人達の間で名高い。シナ海を來た船舶は、この河を十五哩まで溯航する。河口附近には住民がない。(ザイトゥーンの)町は經度一五四度、緯度は十七度數分である」

イブン・サイードはアルメニヤ方面にも旅行した人であるが、そのころ世界第一の大港とまで云われた泉州に對しては右の如き簡單なことを傳えているにすぎない。

次はイブン・バットゥータであるが、この人は前述した如く、親しくその地に至つただけあつて最も詳細な記録を残している。

第三はアブール・フィダーである。Abū'l-Fida' Isma'īl bin 'Alī 'Inadaddīn al-Aiyūbi は西紀一二七三年十一月シリアのダマスクスで生れた。家系はサラディン(サラーフル・ディーン)の血統を引き、祖先は代々ハマリーの領主であつた。少年時代から武人としての教養を受け、長じて、カイロの宗家アイユーブ朝から重要視され、ハマリーの領主として頗る煩忙な一生を送つたのであるが、浩瀚な世界史 Mukhtasar ta'rikhu'l-bashar や世界地理 Taqwimu'l-buldān 等を著した。そのどちらもオリジナリティーと云ふ點からはさして高く評價すべきでないが、他數の先人の著書を引用しているため、それら原著をまだ充分に見得なかつた時代の歐洲東洋學界で重寶がられたのである。しかし、東洋學の進歩につれ、原著が見得る様になつたものが多いので、アブール・フィダーの書の價値は段々に減殺された觀がある。

泉州に關してはその地理書に次の如く記している。

「シナからこちらに來たある旅人が物語つた所によれば……シンジュー Sijiu はこのごろはザイトゥーンと云う。この二つの場所（ハーンフーとシンジュー）はシナのバンドル bandar である。ところでバンドルと云う言葉はシナでは港を意味する」

「ザイトゥーン、即ちシンジュー

イブン・サイードによれば經度一五四度、緯度十七度・第一氣候帶。

ザイトゥーンはシナの港の一つである。旅行者達の話により、よく知られた町である。とある河口に位置し、シナ海を來た船舶はそこに入港する。この灣の廣さは約十五哩である。ザイトゥーンには大河があり、その河口に位置している。そこを訪れたある人が云うには、その町は大層廣く、海から半日行程の所にあり、淡水の河口港があつて、洋上を來た船はそこに進み入る。同じ人がつけ加えて云うには、そこはハマーよりも小さく、荒廢した城壁を持つてゐる。それを破壞したのは蒙古人である。その住民は前述の河口の水を飲み、また井戸の水をも飲んでゐる。⁽⁸⁷⁾」

これで見るとアブル・フィダーが引用した文献はこの部分では前掲のイブン・サイードの書だけで、あとはシナから來た旅人から直接聞いた所を記してゐるのである。そして、その旅人は「シナでは港のことをバンドルと云う」と云つてゐる。バンドルは勿論ペルシヤ語で a city; an emporium; a port, harbour, trading town, to which numbers of foreign merchants resort なると Steingass は説明してゐる。この點から見て、アブル・フィダーに泉州の事情を物語つた旅人はペルシヤ人ではないかと想像されるのである。

X

X

X

X

次にはラシードツ・ディーン Rashid ud-Din (1247 頃～1318) の集史 Jamī'ut-Tawārikh の一節である。ラシードツ・ディーンに就いては今更言葉を要しないが、イル汗國に仕えたペルシャ人中最も優秀な分子の一人で、その史眼は云うまでもなく、地理上の知識も當時の第一人者であつた。惜しいことに集史の最後の部分に豫定された世界地理の部は、果して實際書かれたものか、それとも散佚したものか、今では見るよしもない。しかし、今に残つた部分にもシナ全般の地理に關する興味深い記録がある。元朝の版圖に十二の Sing (省) のあることを述べ

「第七、Fuchū (福州)。これはマンジ (蠻子) の一都市である。省はもとザイトゥーンに置かれたが、後にこの地に置かれ、今もそのまゝである。(中略) ザイトゥーンは船舶の大出入港で、その長官は Boha-addin Kandari である」と云つている。⁽⁸⁸⁾

元の世祖は至元十五年 (一二七八) に行省を泉州に置いたが十八年に福州に遷し、十九年に泉州に戻し、二十年にまた福州に徙し、二十二年に江浙行省に併入したと元史地理志にはあるが、異説もあつて、三山續志 (元の致和年間一三二八の編と云う) には至元十五年に行省を福州に置き、十六年に罷め、二十年に復た置き、二十二年に江西行省に併入し、二十三年に復た置き、明年に行尙書省に改めた。二十八年にはまた江西に併入、二十九年には行中書省を福州に置いたとある。⁽⁸⁹⁾ ラシードツ・ディーンが修史の命を受けたのは西紀一三〇〇年 (元の成宗の大徳四年)、一部分をウルジャイトウ汗に献じたのが一三〇六年四月十四日、全部の完成したのが一三一〇—一三一年ころと云われるので、彼の傳えたシナの事情は大體十三世紀末ころまでのものと見てよいであろう。その長官バハー・ウツ・ディーン・カンダリーは勿論イスラム教徒であろう。Kandar と云う地名は判明しないが、或はスイジスターンの Qandahar の人

を指す *Qandahari* の誤りではあるまいか。假にそうとすれば、これもペルシヤ人と思われるが、單に私の臆測に過ぎ
なす。

×

×

×

×

元朝の末、順宗の至正十七年（一二五七）三月以後、泉州在住の西域人は、万戸賽甫丁 (*Saii ud-Din*) 阿迷里丁 (*Amir ud-Din*) 等を首魁として亂を起した。福建通志によれば（卷二六六）阿迷里丁の率いたのは亦思巴奚兵であつたと云う。張星煨氏は閩南人は奚を *heh* と發音するので、これをペルシヤの名邑 *Ispahan* の譯音であろうとしてゐる。そして阿迷里丁も賽甫丁も皆ペルシヤの回教徒とし、「波斯軍隊中國に駐す」「元末泉州波斯戍兵之亂」などと云う題目を設け、その次に、この時の西域人の叛亂の資料を集めてゐる。この亂については桑原博士も注意され、元末に南支一帶に色目人排斥の氣運が盛であつた。この氣運は泉州方面が一番強かつたであろうとし「蓋し江南のうち福建は色目人の淵藪にして、福建のうち泉州は實にその窟宅たり。元末に賽甫丁、阿迷里丁、那巫那（那兀納）の如き、泉州在住の回教徒は、數年に亘りて閩中に、暴威を逞くせり。此等回教徒の事蹟は、詳に「八閩通志」卷八十七に見ゆ。」とし、アルナイス神父が「年代記の云ふ所に據れば、元代の末年に、泉州居住のアラビヤ人同市を占領せり。但その期間は短かりき。此の事件後は支那官憲が、彼等を服従せしむる爲に、その取締を嚴重にし、自然彼等の多數が、泉州に來航することを見合すに至りしは、想像し得べきことなり (*Young Pao*. 1911, p. 696)」と述べたのを引き「妥當なる見解に遮幾からん歟」と云われた。⁽⁹²⁾

私はアルナイス神父の如く「泉州居住のアラビヤ人」と見ることに同意し得ない。張星煨氏の如く、ペルシヤ人の

叛亂と見る方をとりたい。ただし、張星煥氏は「亦思巴奚兵」をイスパハーンの兵と考えている。誠に面白い考ながら「奚」を han の音寫と見るのは少し無理ではなからうか。ペルシャ語で sipāhi は騎士、兵士を意味し、インドのセポイ (sepoys) もその轉訛である。また sipāh, supāh は軍隊、兵士 (複數) を意味し、イスパーハ Ispah は大軍の義である。そして Steingass によれば Ispāhān と云うのも、軍隊常駐の所と云う様な意味を持つとある。故に八閩通志や福建通志に亦思巴奚兵とあるのは、確にペルシャ語ではあるが、イスパハーンに限つたものでなく、ペルシャ人を主力とする軍勢と云う意味ではないかと私は考えている。

阿迷里丁を殺して叛軍を率いた泉州の阿巫那と云う人物は「もと番人を以つて市舶を主る」とあつて、恐らく西域人であろうと思われる。また回寇那兀納と云うものも現われ、桑原博士引用の古今圖書集成 (一千五十二卷) には「西域那兀納者、以^レ總^ニ諸蕃互市^ニ而至^レ泉」とある。桑原博士は「那巫那、即ち那兀納」とされたが阿 (別本に那) 巫那と那兀納は果して同一人であろうか。また清淨寺修理に盡力した金阿里も叛軍中に加わつて活躍している。

要するに元末泉州に於ける西域人の叛亂は、宋代から少くとも二百年間以上も續いて來たその地のペルシャ人のコロニーの最後を示す悲劇であつたらしい。これによつて同地在留のペルシャ人はその主力を失い、やがて元末明初の争亂の波間に姿を没し去つたものと思われるのである。故にこの間の事情については、もつと詳細に考うべきであるが、それは他日に譲り、本論ではこれで打切ることとしたい。

しかし、その叛亂を序曲とし、根柢から泉州の運命を脅かす社會的大變動の時が迫りつゝあつた。元朝が減びて朱明の世となり、その對外政策も一變するに至つたからであるが、一方西アジアのイスラム世界も益々活力を失い、沈滞に

沈滞を重ね、印度洋、支那海上に雄飛した彼等の貿易船も段々に減少して行つた。ユール氏は「中世紀を通じ、十四世紀までザイトゥーンはシナに於ける通商港として西方と深い縁があつた」蒙古人の驅逐と共に、シナと歐洲との間にはヴェイルが下りた。十六世紀にそれが揚つたときには、ザイトゥーンは消え失せていた」と云つてゐる。⁽⁹⁸⁾ 確にそのかみの繁榮を極めた國際港ザイトゥーン、恐らくは清淨寺の塔からムアッジンが壯重な調子でアザインを唱え、信徒を祈禱によびつどえたものかと思われるイスラム教徒街のあつたザイトゥーンは夢の如く消え失せていた。そこにあつたと思われるペルシャ人のコロニーも勿論同じ運命を辿つた。そして閩南のさびれた地方港泉州の街頭に崩れかけた清淨寺が立つて居り、まつたく漢人化した一塊りの回教徒がそこでアルラーホの名を呼んでいたのである。

しかし消え失せていたのは、ユール氏の云つた如くザイトゥーンのみでなかつた。ペルシャ灣からシロ(シナ)の海まで、七つの海と云われた東西交通上の海路に、かつては彩帆を落日にそめ、また朝なごの海に白いみおをひいた數百數千の回教徒の船も消え失せていたのである。

結 語

宋元時代の泉州は世界的の通商港であつた。故に各國の人々がそこを訪れたことは云うまでもない。元代にはイタリヤの商人などまで、その地に赴いたらしく見える。しかし、そこに有力なペルシャ人の居留地があつて、大きな財力を握り、海外貿易上大きな勢力を占めていたらしいことが、種々の點から看取せられるのである。故にこの勢力を背景とした者は、大きな役割を演ずる事が出来た。蒲壽庚や元末の賽甫丁、那兀那等の如きは皆その例であらうと思う。

桑原博士の蒲壽庚の研究は、東西交通史上の泉州の歴史をえがいて心憎いまでである。しかし、壽庚をアラブ人と云

われた點のみは首肯出来ぬものがある。この點がはつきりしないと、泉州の蕃坊の性質までその特徴が明かになつてこない。故に私は、ここに専ら彼地にペルシヤ人が勢力を占めていた事實を明かにしようとして見た。

蒲壽庚をペルシヤ系の人と断定する明確な史料は、今の所ないけれども、泉州のペルシヤ人を主とする外人居留地の性質から見て、それを背景に興つた西域人蒲壽庚は、アラビヤ人とするよりは、ペルシヤ人とした方が妥當である……これが私の考えである。

アラブ族とペルシヤ人（イラン族）とは、西アジアに對立する二大民族であつて、この兩者を混同することは許されない。云うまでもなく一方は典型的なセム族であり、他方は豊かな想像力にめぐまれたアリアン族である。しかし兩者の文化は互に影響し、或はもつれ或は反撥した。ことにイスラム教の起つて後、イラン族が漸次これに歸依するに及んでは、ある程度はアラビヤ語までとり入れられたため、外部世界では兩者を混同することもあつた。例えば東洋史上の「大食」と云う言葉も、唐代あたりでは、専らアラビヤ人の意味に多く用いられ、「波斯」とは明かに區別されているが、宋代ころになると、イスラム化したペルシヤ人までそのうちに包含されて、かく呼ばれた場合が少くない。西洋史上の「サラセン」と云う言葉も同様で、最初はアラビヤ人、それも北部の一部族のみであつたのが、イスラム勃興後は、廣くイスラム教徒の義に用いられる場合が多かつた。

しかし乍ら、アラブ人とペルシヤ人の區別は、依然はつきりしていて、早くも八世紀後半、即ちアツバース朝の初期ころから、ペルシヤ人の間には、アラビヤ人の優越主張にレジスタンスを行う一種の民族思想とも云うべきシュウビーヤ Shu'ūbiyah の風潮が起り、徐々に文化的分離の傾向に赴いた。イスラム文化に關係した研究に、イラン族とアラ

ブ族の區別を輕視することは大きな錯誤である。

本稿の如きは、もとより名著「蒲壽庚の事蹟」に啓發されたもの、首尾一貫してこれに依存したものである。決してその謬を正すなどと云う潜越な態度をとるものではない。極めて徐々とながら、わが國の西アジア研究も歩を進めているので、時代と共に生じて來た若干の異説を敢てここに呈示して見たのみである。

註(1) 北宋末の阮閱の詩話總龜に南宋末の蒲壽庚兄弟の事を記す筈がないことは桑原博士の既に指摘された所で、もしあればその

部分は續成のものかと疑を述べていられる。(蒲壽庚の事蹟頁一一九、以下すべてこの書は岩波版による)

(2) 藤田豊八博士、東西交渉史の研究、南海篇、頁七六―七七。

(3) 藝文大正四年三月號、頁一〇〇。

(4) 蒲壽庚の事蹟頁一一九。

(5) 藤田博士、南漢劉氏の祖先につきて(東西交渉史の研究、南海篇)頁一六三。

(6) 泉州訪古記、頁四、(史學與地學第四期)

(7) 蒲壽庚頁一一一。

(8) 同 頁一一四。

(9) 同 頁一一四―一五。

(10) 同 頁一一六。

(11) 同 頁一四九―五〇(註三三)

(12) 同 頁一四九。

(13) Encyclopaedia of Islam, Abu 〇項。

(14) Barbier de Meynard: Surnoms et Sobriquets dans la Littérature Arabe, Paris 1907.

- (15) Biberstein Kazimirski: Dictionnaire Arabe-Français, 1860 Paris.
- (16) 過海大師東征傳。
- (17) Reinaud: Relation des Voyages faits par les Arabes et les Persans dans l'Inde et à la Chine, tome II, Paris 1845, p. 63.
- (18) Paul Ravaisse: Deux Inscriptions Couffiques du Campa, Journal Asiatique, 1922.
- (19) Ibid, p. 260.
- (20) Père Raphaël du Mans: Etat présent de la Perse en 1660, publié et annoté par Charles Schefer, Paris, 1890.
- (21) Voyages du Chevalier Chardin en Perse et autre lieux de l'Orient, édité par Langlès, Paris 1811, t. VI, pp. 124—128.
- (22) Ravaisse: Deux Inscriptions, p. 261.
- (23) Ibid, p. 287.
- (24) Ibid, p. 284. 中央アジアのトルコ族の間を於ける bāy, beg, bī' はヌマンリー・トルコの bey はもと富裕な貴族、一部族または數部族連合の首長を意味した。
- (25) Voyages d'Ibn Batoutah, texte arabe, accompagné d'une traduction par C. Defrémery et R. Sanguinetti, Tome 4, Paris 1922, p. 269.
- (26) 蒲壽庚、頁一二。
- (27) 同 頁三九。
- (28) 同 頁四〇。
- (29) Paul Pelliot: Les Plus anciens monuments de l'écriture arabe en Chine (Journal Asiatique, 1913, Juillet-Août, p. 184).
- (30) 羽田亨、「日本に傳はれる波斯文に就て」(史學研究會講演集第三)頁一六一。
- (31) 乾隆泉州府志卷廿六、職官。

- (32) 泉州府志(廿六)に「善政尤多。所著心政經、勸諭文、人皆傳誦。祀名宦。明嘉靖間郡人復立祠郡治之東。專祀之」とある。
- (33) 蒲壽庚の事蹟、頁四九。
- (34) 石田幹之助、南海に關する支那史料、頁一七二。
- (35) 乾隆泉州府志に據れば、宋代にその市舶司として名を録せられたものが八十四人ある。交替の可成はげしかつた事がわかる。
- (36) Friedrich Hirth & W. W. Rockhill: *Chau Ju-Kua, St. Petersburg* 1912, p. 124, note 28.
- (37) 蒲壽庚の事蹟、頁四六、頁五二(註三)
- (38) 同上、頁五二(註三)
- (39) Le Strange: *The Lands of the Eastern Caliphate*, Cambridge 1930, pp. 258—59. Yāqūt: *Mu'jam al-Buldān*, Leipzig, 1866—73, *Siraf* の項。
- (40) 蒲壽庚、頁一四六。
- (41) Chao Ju-Kua, p. 124, note 27.
- (42) 張星烺、泉州訪古記、頁十、十一。
- (43) 明の陳懋仁の泉南雜志によるに、孫勝夫は蒲壽庚の同志であり、かつその下僚であつた。(蒲壽庚、頁二二〇)
- (44) 泉州訪古記、頁三。
- (45) 蒲壽庚の事蹟、頁一四二。
- (46) 同 頁一四二。
- (47) 同 頁一四九。藤田豊八「宋代の市舶司及び市舶條例」(東西交渉史の研究、南海篇)頁三三五。
- (48) 藤田豊八、「宋代の市舶司」頁三三六—三三七。
- (49) 陳萬里「閩南遊記」、一九三〇年上海刊、頁四。
- (50) 藤田博士所引(宋代市舶司頁三三七)萬曆泉州府志には「文廟青龍の左角と爲す」とあると云う。

- (51) 蒲壽庚，頁一一六。
- (52) 同 頁一四九—一五〇。
- (53) 同 頁一五二。
- (54) 同 頁一六〇，註四。
- (55) 同 頁一八六。
- (56) H. Yule: *Cathay and the way thither*, vol. 2, London 1913, pp. 183—84.
- (57) *Ibid.*, vol. 3, pp. 229—230.
- (58) Greg. Arnâiz et Max van Berchem: *Mémoire sur les antiquités musulmanes de Ts'iuan-Tcheou* (T'oung Pao 1911), pp. 704—705.
- (59) *Ibid.*, pp. 705—707.
- (60) Charles Schéfer: *Notes sur les relations des Musulmans avec les Chinois*, Paris, 1895, p. 23. P. Ravaisse: *Deux Inscriptions* (*Journal Asiatique*, 1922) p. 207.
- (61) 張星烺，*中西交通史料匯編*，第三冊，*古代中國與阿拉伯之交通*，頁八六。
- (62) *Voyages d'Ibn Batoutah*, vol. 4, p. 271.
- (63) *Voyages d'Ibn Batoutah*, vol. 2, pp. 90—91. Yule: *Cathay*, vol. 4, p. 120.
- (64) *Ibid.*, vol. 4, p. 270.
- (65) *Le Strange: Lands of the Eastern Caliphate*, p. 168.
- (66) *中西交通史料匯編*第三冊，*古代中國與阿拉伯之交通*，頁八六。
- (67) *Le Strange*, pp. 161—162.
- (68) Yule: *Cathay*, vol. 4, p. 119.
- (69) *閩書卷五十三*，*文蒞志*。

- (70) 張星煥、泉州訪古記、頁五。陳萬里、閩南遊記、頁六。
- (71) 閩南遊記、頁六。
- (72) T'oung Pao 1911, pp. 716—717.
- (73) Ibid. p. 727.
- (74) Ibid. p. 727.
- (75) Yule: Cathay, vol. 2, pp. 183—184.
- (76) Ibid., vol. 3, pp. 71—75.
- (77) Ibid., vol. 3, p. 74, Note 2.
- (78) Ibid., vol. 3, p. 180. この一行は Andrea (Andrew) の 名を William of Nassio (Guillermo de Nassio) が 支那 の 民族 の 一 部 と 見 做 した こと である。
- (79) Yule: Cathay, vol. 3, p. 216. この一行は「約三年間 Cambalec に住んだことである」。
- (80) Ibid., vol. 3, pp. 229—230.
- (81) Ibid., p. 230, Note 1.
- (82) A. C. Moule: Christians in China, before the year 1550, London 1930, p. 81, Note 4.
- (83) 陳萬里、閩南遊記、頁六一七。
- (84) 張星煥、泉州訪古記、頁七。
- (85) 閩南遊記、頁十二—十三。
- (86) Gabriel Ferrand: Relations de Voyages et Textes Géographiques, Arabes, Persans et Turks, relatifs à l'Extrême-Orient, Tome 2, Paris 1914, p. 349. この行は パリの 国立 図書館 の 所蔵 稿本 二二三四號 の 写本 である。 同 氏は ズイートゥーン と 讀む べき ものと 主張 して いる が、 私は と ら ぬ。 矢張り ズイートゥーン と 發音 された ことは マルコ・ポーロ の 書 初め 多數 の 傍證 がある。 イブン・サイード の 傳記 については C. Brockelmann: Geschichte der Arabischen Litte-

